

CLA-アーカイブズ 10

FDを考える7

# 大学の人文学に未来はあるか？

A FUTURE UNIVERSITY WITHOUT HUMANITIES ?

ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト

Hans Ulrich Gumbrecht

司会 石井康史

Yasushi Ishii

慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター主催

FD を考える 7

## 大学の人文学に未来はあるか？

2007 年 3 月 13 日(火) 14:00 ～ 16:00

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階 シンポジウムスペースにて  
(同志社大学教育開発センターへの同時中継有り)

### Program

- |         |                      |                  |
|---------|----------------------|------------------|
| 14:00 ～ | はじめに                 | 近藤明彦             |
| 14:05 ～ | 司会挨拶・講演者紹介           | 石井康史             |
| 14:10 ～ | 基調講演「大学の人文学に未来はあるか？」 | ハンス・ウルリッヒ・ゲンブレヒト |
| 15:15 ～ | 質疑応答                 |                  |

## 講師

### ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト (Hans Ulrich Gumbrecht)

スタンフォード大学アルベール・ゲラルド文学講座教授

コンスタンツ大学 Ph.D 取得。モンテビデオ大学・モントリオール大学・ジューゲン大学から honorary Ph.D を授与されている。

#### 専門分野：

スタンフォードでは比較文学科のほか、スペイン・ポルトガル語学文学科、フランス・イタリア語学文学科、ドイツ研究科、近代思想文学プログラムでも教鞭をとる。モントリオール大学比較文学科 professeur associé、フランス高等社会科学研究所 directeur d'études associé、コレージュ・ド・フランス professeur attaché を兼任。また American Academy of Arts and Sciences 会員に選出されている。

研究領域は、ヨーロッパ中世文学・文化、スペイン、フランス、ドイツ、イタリア各国のルネサンス期以降の文学、19 世紀・20 世紀アルゼンチンおよびブラジル文学、さらに美学、思想史、学芸史、社会学、システム理論など多岐にわたる。

## 司会

### 石井 康史

慶應義塾大学経済学部助教授

#### 専門分野：

比較文学、スペイン・ラテンアメリカ文学、表象文化論、メディア史、日本近代文学など。



左：石井康史氏 右：グンブレヒト氏

# はじめに

大学教養研究センター コーディネーター 近藤明彦

教養研究センターは3月13日にアメリカスタンフォード大学よりハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト教授を招いて「大学の人文科学に未来はあるか？」のテーマでセミナーを開催した。このセミナーは2003年より教養研究センターが不定期ではあるが継続的に行っているFD (Faculty Development) に関するセミナー・ワークショップの一環として行われたものである。

1991年に行われた大学設置基準の大綱化にともなう各大学におけるカリキュラム改訂以降、FDという言葉が聞かれるようになったが、2003年当時においても教員の多くはFDについてよく理解していない現状にあるのではないかと考えから、教養研究センターではFDに関するセミナー・ワークショップを開催することとなった。これはFDに関するさまざまな事項や現在大学が置かれている状況について教員各自が理解を深め、よりよい教育プログラムを開発するための活発な議論が行われるきっかけを作ることが出来ればとの願いから企画されたものであった。

大学設置基準の大綱化によって、それ以前に行われていたアメリカの戦後統治政策に由来する大学での人文・社会・自然の3分野からなる一般教育 (General Education) が、専門教育に対しての教養教育という対比の中で見直されたわけであるが、時代の趨勢としてはアメリカにおけるビジネススクールやロースクールを手本に各種の職業専門大学院が設置されていく中で、現在の日本の大学教育の中核を成す専門教育 (職業教育／現実社会にて役立つ知識の教育) と対比される「教養」の教育はどのようにあるべきかとの議論が様々な角度からなされてきた。さらには今回グンブレヒト教授のセミナーのタイトルに取り上げられた人文学 (Humanities) は科学 (Science) に対する概念としてとらえられておりエビデンス・ベースで実証可能性が高く実利に繋がる自然科学や社会科学に比べ実用性という点では若い世代からはあまり役に立たないと思われる。

このような背景の中、教養教育としての人文学が学生にどのような能力を与えるかについてグンブレヒト教授は今回「リスクフル・シンキング」をキーワードとして



近藤明彦氏

我々に明快に示してくれた。思えば階級制度が色濃く残る19世紀初頭頃までの貴族や富裕市民層が学ぶイギリスの中・高等教育においてはルネッサンス期ローマの影響を受けたりベラル・アーツ教育としてギリシャ・ローマの古典を中心に教育が行われていた。そして社会の実用に直接は供さないリベラル・アーツを学ぶことにより指導的立場の者が正しい決断を行うことが出来ると考えられていた。グンブレヒト教授のセミナーを聞きながら教養教育における温故知新を再認識することが出来た次第であるが、大学において教養に関わる教育科目を担当する者の一人として非常に刺激的な内容のセミナーであり、自らが担当する科目が学生にたいしてどのような能力を開花させるために機能しているかを確認する必要性を再認識させてくれるものであった。

## PROFILE

慶應義塾大学体育研究所教授

慶應義塾大学教養研究センター コーディネーター

1978年日本大学文学部研究科教育学専攻博士前期課程修了。

慶應義塾大学助手、助教授を経て1995年より現職。1991年から92年までドイツケルン体育大学留学。

教養研究センター立ち上げの基礎となった教養研究研究会 (2001年1月～2002年3月) のメンバーとして、高等教育における教養教育モデル構築研究に携わる。2002～2006年は教養研究センターの副所長を務め、現在も体育研究所での知見を踏まえ、シンポジウムの検討、実施、教養教育のカリキュラム研究を中心とした教育のあり方について、積極的な研究活動と実践を展開している。

# A FUTURE UNIVERSITY WITHOUT HUMANITIES ?

## 大学の人文学に未来はあるか？

Hans Ulrich Gumbrecht

ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト

(スタンフォード大学アルベール・ゲラルド文学講座教授)

I would like to start with an apology for not speaking Japanese. My friend Yasushi Ishii knows that I gave it a try once in my life, but I then found out it was too late to keep up with my youngest daughter who started learning your language when she was 13. So I realized that a more than 55-year old brain is just no longer good for so much vocabulary in such a foreign language.

But I thank you for the invitation and feel really honored to come to Keio, honored to speak at the university where my friend, now a colleague, Yasushi Ishii is teaching.

The future of the Humanities and Arts at the university will be my topic, and before I really start, let me tell you that especially with the German background I have—I was born in Germany in 1948, did my university studies in Germany, and was a professor there until I was forty-one years' old—with that German background, there are probably things that you and I share in the humanities.

For if the history books I have been consulting are correct, they tell me that in the Meiji period, the Japanese

はじめに、私が日本語を話せないことをお詫びしたいと思います。私の友人である石井康史さんが知っているように、私はかつて日本語を学ぼうと挑戦したことがありますが、そのときに私は、13歳で日本語を学び始めた私の末娘に追いついていくにはもう遅すぎることに気づきました。つまり55歳を過ぎた脳は、これほどまでに異なる外国語の大量の語彙を覚えるのにはもう適していないのだということを実感したのです。

ともあれ、慶應義塾大学に招待していただいたことに御礼申し上げます。友人であり今では同業者でもある石井康史さんが教壇に立たれるこの大学でお話ができることを、たいへん光栄に思います。

大学における人文学と教養教育 (Humanities and Arts) の未来についてお話ししようと思うのですが、本題に入る前に、私の背景がドイツにあることを申し上げておきましょう。私は1948年にドイツで生まれ、ドイツで大学教育を受け、41歳までドイツの大学で教えていました。おそらく、このドイツという背景が、人文学に関して考えるときに皆さんと私をつなぐものとなるでしょう。

というのも、私が参照した歴史の本が正しければ、それらの本には、日本の大学は、明治時代に北部ドイツ、

University was founded on the model of the Prussian university from northern Germany. Now when Japanese university system adopted this structure, the humanities were not yet separated from the natural sciences. So in that sense, there is something very common about the German University and the Japanese University System.

I will argue and I will explain that the separation of the humanities and arts from the sciences in Germany transformed the former into the “sciences of the spirit” (“Geisteswissenschaften”), that it has left the humanities with a birth trauma of a loss of worldliness, and that this birth trauma has had great consequences from which up to a certain extent the humanities are still suffering today.

I understand that one of the problems that the humanities are having in Japan is to be taken seriously in a scientific environment. Humanists don't normally say this but it is a serious problem—how “scientific” are the humanities?

Now I would like to start with three anecdotes from my humble life as a professor and as a scholar, and I will tell you about three books that I've recently published. They all got good reviews, but I will talk about the very bad reviews that my books also got because I thought that these very bad reviews are symptomatic for what is going on in the humanities today. One of them has the title *Life and Death of the Great Romanists*. Romanists are people in the humanities interested in the Romance literatures and languages—all the languages that come from Latin, like French, Spanish, Italian, and so forth and literatures. I was using the lives of five great Romanists to find out something about German culture and one interest was to find out why Germans, in specific, were so romantically fascinated with those cultures.

A few months after the book got published I received

プロイセンの大学をモデルにして創立されたのだとあったからです（ちなみに当時のプロイセンの大学では、人文学はまだ自然科学から切り離されていませんでした）。その意味で、ドイツと日本の大学のシステムにはとても似通った部分があるということになります。

後ほど説明しますが、ドイツでの人文学および教養教育は、科学から分離されて「精神の科学」となり、世間からの隔絶という生まれつきのトラウマを抱えるようになりました。その影響は甚大であり、今日の人文学もそれに悩まされている部分があるのです。

さて、日本において人文学が抱えている問題のひとつは、科学という文脈で真剣に取り組んでもらうことの難しさではないかと私は考えています。人文学者たちは普通、そこまで踏み込んで言わないものですが、人文学がどの程度「科学的」な学問かということは深刻な問題なのです。

さて、教員および研究者としての私のつましい経験の中から、近年出版した3冊の本をめぐる3つの逸話をご紹介しますところから話を始めたいと思います。どの本に対する書評も好意的でしたが、ここでは非常に批判的な書評を取り上げてお話しします。というのも、これらの非常に否定的な書評には、今日の人文学に何が起きているか、ということの兆候を見て取ることができるからです。1冊目のタイトルは『偉大なロマニストたちの生と死』です。ロマニストとは、人文学のなかでもロマンス系の言語、つまりフランス語、スペイン語、イタリア語などラテン語に起源を持つすべての言語と、それらの言語で書かれた文学に関心を持つ人たちのことです。私は5人のロマニストの人生を題材にして、ドイツ文化のある側面を理解しようとしたのですが、他ならぬドイツ人が何故あれほどロマン派的に、ロマンス文化に熱狂したのかを明らかにすることにも関心がありました。

本が出版された数ヶ月後に、『ロマニッシュ・フォル

proofs, proofs from a very scientific journal called *Romanische Forschungen* of a devastating review of an Austrian scholar, a linguist, named Hurch.

He said I had abandoned all principles of science and I had therefore lost the right to call myself a scientist. So I thought maybe I had gotten some quote wrong or may have pretended to know about some facts that I didn't really know. But when I read the review, this was not the case. I will tell you the three main points that my reviewer was taking offence with because I think they are symptomatic.

In the first place, the reviewer said that I had actually not referred the intellectual achievements of the five Romanists I was writing about to the present state of research—and this was absolutely true. Only I thought I had announced that I was not interested in that; that the Romanists' research was so old that it wasn't very relevant and that I was fascinated by their lives only. But he took that very badly.

In the second place he protested that I had not quoted all the literature that already existed on these five Romanists—and needless to say that I had not quoted him. He didn't say why this (and his) research would be important for my purpose, but he had noted that I hadn't quoted all the secondary literature that existed on these Romanists.

Thirdly, Dr. Hurch was furious because he said that especially with one Romanist who was Austrian, as the reviewer was Austrian too, I had made some ambiguous statements about this scholar's private life. I had indeed talked about the fact that he was a great womanizer, and always had relationships with female students, and how this got him into trouble—which I found interesting but, yes, it was certainly not a scientific contribution to society.

シュンゲン』(ロマンス語学文学研究)というひとときわアカデミックな雑誌から、フルヒというオーストリアの学者による痛烈な書評の校正刷りが送られてきました。

彼によれば、私は科学のあらゆる原則を放棄し、それゆえ、科学者を自称する権利を失ったということです。そこで私は、自分が誤った引用をしたか、あるいは、よく知らないことを知ったように書いてしまったのかもしれないと考えました。しかし書評を読んでもみると、そうではありませんでした。評者が私を批判する上で争点としていた3つの主要なポイントを挙げてみましょう。人文学の抱える問題の諸症状がよく表れていると思います。

その評者はまず、私が5人のロマニストを取り上げていながら、その5人の知的分野における功績に関して現在どこまで研究が進んでいるのか、そのことについての言及がさっぱりないと指摘していました。これは確かにその通りです。ただし私は、このロマニストたちの研究がとても古く、自分の議論の核心とはあまり関係ないのでそれには関心がないこと、そして彼らの人生のみに強い興味を持っているのだと断っておいたつもりだったのですが、評者のフルヒ氏はそれを悪い意味にとったのです。

第2に、私がこの5人のロマニストたちについての先行研究を網羅的に示していないことに抗議していました。そしてもちろん、私がフルヒ氏の研究に言及していないということにも。彼は何故それが私の研究において重要なことなのかは説明せずに、私がこれらのロマニストたちについての二次的な研究を引用していないことだけを指摘していました。

第3にフルヒ博士は、彼自身もオーストリア人ですが、私がロマニストたちのうちの1人のオーストリア人の私生活をめぐって曖昧な記述をしたと腹を立てていました。いかにも私は、そのロマニストが大の女好きでいつも女生徒たちと関係を持ち、それがもてどんな問題が起きたかを書きました。興味深いと思って取り上げたのです。まあ確かに、それは社会への科学的貢献にはありませんでしたが。



More recently, about a year ago, I published a book on a completely different topic that will come out in Japanese soon, the title is *In Praise of Athletic Beauty*. It is about the aesthetics of sports, and, there, somebody took issue with a fact that I had said it was a thing of beauty, for example, to watch Ichiro steal a base. So I made this positive statement, and the reviewer said that, I, in past years, had been a cutting-edge intellectual, but now as I was starting to praise people, I had inscribed myself into the group of emasculated ex-intellectuals. “Emasculated” is a bad word that I will not comment any further, but it means that I lost my manhood for not being only negative and critical. Humanists, it seems, are not supposed to praise anyone.

Finally, ten years back in 1997, I published a book under the title *In 1926*. My intention had been to give in to the desire for full immersion into a historical period. I did not claim that 1926 was an important year, but I wanted to write a book that went as far as possible in catering to the desire of smelling a year and of course,

さて、もっと最近、1年ほど前のことですが、私はまったく別のテーマを扱った『スポーツ競技美礼賛』という本を出しました。もうじき日本語でも出るはずですが、この本はスポーツの美学について書いたものですが、たとえばイチローの盗塁を見ることは美的経験だという私の意見に異議を唱えた人がいます。その評者は、私のこのような絶賛に対して、私は数年前までは気鋭の知識人だったけれども、今では人を褒めるようになってしまい、去勢された元知識人の仲間入りをしたのだと書いていました。「去勢された」というのは悪い言葉なのでこれ以上のコメントはしませんが、つまりは、常に否定的かつ批判的な態度をとることを放棄することで私が男性性を失ったという意味です。どうやら、人文学者たる者は人を褒めてはいけないことになっているようなのです。

最後に、10年遡って1997年のこと、私は『1926年に』という題名で本を出しました。私の意図は、ある歴史的な時期に完全に浸りきりたいという欲求に従うことでした。1926年が重要な年であるという主張をしたのではなく、ある1年の香りを感じ、触れ、音を聞きたいという欲求をできる限り満たすような本を書きたかったのです



as you will not really smell it, of touching, and hearing the sounds of a year. Now that book got astonishingly good reviews in the public newspapers, but the academic historians really took issue with it, because they told me I had not pursued a method. There was no method to be recognized in this book, and they also told me that I had not related what I wrote about the year 1926 to the present, to the year 1997 when the book came out. I had never said this was my intention, but the historians took offense anyway.

Now, after this opening part of my lecture, you may think that I'm a deeply traumatized person. Do I want consolation from you? But the truth is, I don't know whether it is arrogant to say this, that I am not so traumatized. I rather was somehow proud because I thought that these reactions—very strong reactions—proved that I had hit some nerve in the humanities. That I had somehow touched upon something that was problematic in the humanities—and my hope was that I could use these reviews as a starting point to find out what is problematic in the present situation of the humanities and what may be the limits of what the humanities can achieve at the university today.

\*

From this point on, my argument will get more complicated. There are four parts to it.

In the first part, I will try to develop, based on these negative reviews, what concept of “science” prevails in the humanities today—because I was criticized for the point that I was not scientific enough. So what do these people mean by science?

(もちろん実際には、ある年の香りを感じたりすることはできませんが)。さてこの本は、一般の新聞各紙の書評欄では驚くほどよい評価を得たのですが、学術界の歴史学者たちは、私が方法論を無視していると言って激しく反発しました。確かにこの本にはこれと言った明確な方法論はありません。また、もうひとつの批判は、この本で取り上げた1926年と本が出版された当時の「現在」、すなわち1997年との関連付けがされていないということに向けられました。私はそのような意図があるとはどこにも書いていないのですが、とにかく歴史学者たちはそのことに腹を立てたのです。

さて、これまでの導入部分を聞いて、皆さんは、私が深いトラウマを抱えた人物で、皆さんに慰めてほしいがつているのだろうかとお思いになるかもしれません。しかし実のところ、これを口にするのが傲慢なことかどうかわかりませんが、私はそのような心の傷を負ってはいません。むしろ、なんだか誇らしく感じたのです。これらの激しい反発は、私が人文学の神経を逆撫でしたということ、人文学の抱える問題点に触れたということの証だと思ったからです。そこで、こうした書評を出発点として、人文学が現在抱えている問題を明らかにし、今日の大学で人文学が果たせる役割とその限界を考えることができるのではないかと考えました。

\*

ここから、私の議論は少し複雑になります。その4部構成を見取り図として示しておきましょう。

はじめに、これらの否定的な書評から出発し、今日の人文学において「科学」という語がどのような概念として捉えられているのか、考えてみたいと思います。私に向けられた批判は、私が十分科学的でなかったという点に集約できるからです。彼らは科学という語をどのような意味で使っているのでしょうか？

In the second part, I will go back historically and I focus mainly, although not exclusively on the German academic history, trying to explain when and why it happened that humanities would develop this ambition to be scientific. This presupposes that it did not always happen, this situation, that in the early 19 century this ambition did not exist.

In the third part, coming back to the present, I will try to characterize the present situation of the humanities at large and of the university at large and I will then try to make a proposal about what the humanities could contribute to the university in the present situation. My key concept there, I'm very proud of it because its my own concept, will be the concept of riskful thinking. My proposal will be that the humanities should try and specialize in riskful thinking.

In the fourth and final part I will speculate briefly about the future of the university in general and about the possibility that the humanities and arts may disappear from that future. I know that, normally, when humanists are asking this question, they do it in order to say that the humanities will gloriously survive, that the humanities are the most important part of the university. . . but nobody believes that anyway. So when I am asking this question at the end, about the survival or non-survival of the humanities at the university of the future, this, keep it in mind, will be a serious question. I hope it will not scare you, but is a serious question nevertheless.

Part one: what are the components that one can induce from those reviews as belonging to a concept of science applied to the humanities that one can tease?

In the English language of the Anglo-American tradition the humanities are not regarded to be a science. I was telling an anecdote this morning about when the

2 番目に、歴史を遡り、他の国にも言及しますが、主にドイツの学問の歴史に焦点を合わせて、人文学が「科学的」でありたいという野心を持つようになったのはいつか、そしてそれは何故か、説明したいと思います。このように言うと、この野心がいつでもそこにあるというわけではないことが前提に含まれていますが、実際、このような野心は 19 世紀初頭には存在しなかったのです。

3 番目に、再び現在に戻って、人文学全体および大学全体が現在どのような状況にあるのかをお話しし、そして現在の大学に対して人文学がなし得る貢献についてひとつの提案をしたいと思います。そこで鍵になるのが、「リスクフル・シンキング (リスクを伴う思考)」という概念です。この概念は私の独創なので、誇りに思っています。私の提案は、人文学はリスクフル・シンキングに挑戦し、それに特化すべきだということです。

4 番目に、結びとして、未来の大学像を全体として考え、その未来においてももしも人文学および教養教育がなくなるとしたら、という可能性について短いコメントをしたいと思います。人文学者がこのような問いかけをする場合、人文学は輝かしく生き残るだろう、人文学は大学のなかで最も重要な分野なのである、と結論づけることを意図していることが多いものです。しかし、そのようなことを信じる人は誰もいません。講演の最後に私が未来の大学において人文学が生き残れるか否かという問いを発するときには、その問いは真剣なものなのだとということを覚えておいてください。脅すつもりはありませんが、これは本当に深刻な問題なのです。

では第 1 部に入ります。導入部で紹介した書評を出発点として、「科学」という概念をあてはめられて人文学が苦しんでいる場合、その概念を構成する要素は何なのか考えてみましょう。

アングロ・アメリカの大学で使われる英語の場合、人文学は科学のひとつだとは考えられていません。今朝もこんな逸話をお話ししました——1991 年に旧ソ連のゴ

then president of the former Soviet Union, Michael Gorbachev, came to Stanford in 1991 and gave a speech, he started by saying, “I’m greeting the scientists of Stanford University.” All the humanists booed because they thought they were excluded, but this had not been the intention. Rather, the Russian tradition, like the German tradition and like the Japanese tradition, includes the humanists into the sciences.

My reviewers were implying in the first place that the humanities as a science are supposed to be a solidly closed system—“a solidly closed system” in the sense that each new step that you take implies the obligation to take into account all the previously taken steps. Therefore, they found it bad, for example, that in writing about those Romanists, I would not quote all the secondary literature that had ever been published about them. It also means that each new discovery you name has to fit into the picture of discoveries that have been made before. So whatever does not fit cannot be recognized. With this basis, one assumes that all disciplines somehow make progress, that there

ルバチョフ大統領がスタンフォード大学を訪れた際、彼は「スタンフォード大学の科学者の皆様方にご挨拶申し上げます」と言ってスピーチを始めました。それを聞いた人文学者たちは皆、自分たちが排除されたと思って不満の声を上げました。しかし、そういうつもりではなかったのです。ロシアの伝統においては、ドイツや日本と同様、人文学は科学の中に含まれているからです。

私の本を批判した論評者たちが暗示していることは、第1に、科学としての人文学は確実に閉ざされたシステムであるべきだということです。「確実に閉ざされたシステム」というのは、新しい段階に進むためには先行研究をすべて踏まえる義務があるという意味です。そのため、たとえば私がロマニストたちについて書きながら彼らについての先行研究を網羅的に示そうとしないのは悪いことだと思われたのです。それはまた、新しい発見はそれ以前の様々な発見によって作り出された流れにうまく適合するものでなくてはならないということも意味しています。そのため、それに適合しないものは評価されないということになります。この原理に基づいて、すべての学問は進歩するものだと考えられ、たとえば、ダン



is for example, progress in the interpretation of Dante. I'm saying this because I do of course believe that one will interpret Dante differently in different cultures and different ages, but I do not think that you will ever make progress in the interpretation of Dante or of Proust or of any other great author.

Secondly, to call the humanities science means that you believe that you have to choose a method—that you have to work with a method. Now what is a method? A method is a canonized sequence of actions structured as steps that will lead you from predefined questions to predefined results. If you have a certain type of question and you want to find a solution, then you use a method. The greatest glory of a method seems to be that you don't have to think yourself. If you have a method you can just follow its steps and your mind can go on autopilot.

The third feature of the concept of “science” is that this goal-orientedness and this reliance on methods and their automatic procedure is hailed and celebrated as “rigor.” Science wants to be rigorous. When you talk about science, you praise the scientists for being very rigorous and that of course is in contradiction with individual inspiration. If you are methodical and rigorous you are not allowed to follow individual inspiration. I might almost say that the insistence upon methods and on rigor kill individual inspiration.

Now fourthly, what the closure of “science” is supposed to achieve is the fulfillment of two different goals. One goal is that science as a closed system is supposed to produce Truth. The problem is, I want to say this as a footnote, that we do not really know anymore today, philosophically, what we mean when we say Truth. Secondly, science is supposed to produce solutions to problems. Now if we do not really know what we mean when we say Truth, the insistence on solutions becomes all the more important. But I doubt that the humanities have ever produced solutions although, if you conceive

テの解釈にも進歩があるということになります。このように言うのも、文化や時代が異なればダンテの解釈も変わるだろうと私ももちろん思いますが、ダンテに限らずブルーストも、そして他のいかなる偉大な作家の作品を解釈する上でも、そこに何らかの進歩を生み出すことができるとは思わないからです。

第2に、人文学を科学と呼ぶならば、ひとつの方法論を選択し、その方法論に従わなければならないと考えることになります。では、そもそも方法論とは何でしょうか？方法論とは、予め決められた問いから予め決められた結果を導くために辿っていくステップとして定式化された一連の流れのことです。類型に当てはまる疑問があり、その解答を見つけないといけない場合に、方法論を使うわけです。方法論の最も素晴らしい点は、あなた自身が考えずに済むということでしょう。方法論さえあれば、そのステップを辿るだけで思考が自動操縦で進むのです。

「科学」概念の第3の特徴は、このようなゴールを目指す姿勢と、方法論を用いて自動的に進む手続きに依存することが、厳密さとして歓迎され賞賛されることです。科学は厳密であろうとします。科学について語るときには、科学者たちは非常に厳密であると言って称えられるわけですが、その厳密さとは、もちろん個人のインスピレーションとは相容れないものです。方法論と厳密さに固執すれば個人のインスピレーションを殺してしまうことになると言ってもいいかもしれません。

第4に、閉ざされたシステムというものは、2種類の異なる目的を達成することになっています。まず、閉ざされたシステムとしての科学は「真実」を生み出すものだと思われています。しかし、哲学的なレベルでは「真実」とは何かということが今日の私たちにはもうよくわからなくなったという問題があるということを、但し書きとして付け加えておきましょう。2つ目に、科学は問題に対して解答を与えることを期待されます。「真実」が何を意味するのかがよくわかっていないのですから、解を得ることへのこだわりは尚さら重要になります。人文学が未だかつて何かの解答を生み出すことができたの

them as a science, then you expect them to produce solutions.

A fifth and final point—the humanities are supposed to be critical—critical in the sense that they are supposed to discover or point to shortcomings in society. So humanists feel normally well when they say what everybody has been saying that for ten thousand years of human culture, i.e. that the present is much worse than the past has been etc. Humanists have always been critical. If you praise something—if you write a book in praise of athletic beauty, for example, God forbid—but even if you praise your favorite author, you run the risk of being regarded as an emasculated ex-intellectual. So the dignity of an intellectual seems to lie only on the negative side. With a permanent grudge you are regarded a good intellectual.

\*

But where does this ambition “to be scientific” come from? Why are the humanities, especially in the German tradition, so ambitious and since when are they so ambitious to be scientific—and I understand this is something that is shared by the humanities in the Japanese university system. As a premise, I’ve already mentioned it, let me say it once again, that this pressure to be scientific is of course differently strong in different cultures. In the Anglo-American tradition, the humanities are definitely not supposed to be sciences—they are called Humanities and Arts. There, the word science is a word that does not include the humanities and you also don’t use other words and concepts for the humanities that are normally associated with science, like research or investigation. The word Art—Humanities and Arts—comes from the medieval *Artes* faculty. But although, strictly speaking, this is a misunderstanding I think

かどうか疑わしいところですが、人文学を科学と見なすならば、解答を出すことが期待されることになります。

第5に、これが最後のポイントになりますが、人文学は批判的であるべきだと考えられています。この場合の批判的であるとは、社会の欠点を発見あるいは指摘するような態度です。そのため人文学者は、1万年も前から人間が言い続けてきたようなこと、つまり「昔はよかったが、現在はまったくひどいものだ」などと言って満足感を覚えることが多いのです。人文学者というものは昔からずっと批判的なのです。もしも何かを褒め称えるようなことをしたら（たとえば、スポーツ競技の美しさを賞賛する本でも書こうものならとんでもないことになるわけですが）、賞賛する対象が好きな作家である場合でさえ、去勢された元知識人と見なされるリスクを負うことになるのです。つまり知識人としての威厳は否定的な態度によってのみ生まれるということで、永遠の悪意のようなものをもっていれば、優れた知識人であると思われるのです。

\*

しかし、この「科学的でありたい」という野心はどこから生まれたのでしょうか？ 何故、人文学、とりわけドイツ流の人文学にはこのような野心が強いのでしょうか？ そして、科学的であろうとし始めたのはいつなのでしょう？ この野心については、日本の大学システムにも共通するところがあるのではないかと思います。前置きの部分で既に触れたことの繰り返しになりますが、科学的でなくてはならないという圧力の強さは文化によって異なります。アングロ・アメリカの伝統においては、人文学は「Humanities and Arts」（人文学と教養教育）と呼ばれており、それが科学の一分野であると考えられていないことは明らかです。アングロ・アメリカで「科学」と言ったとき、そこに人文学は含まれておらず、「research」や「investigation」と言った、通常、科学に関連する用語や概念も人文学の分野では用いられないのです。「Humanities and Arts」という呼称にある「Art」は、中世の大学の「学芸（Artes）」学部から来た言葉です。

that in the Anglo-American tradition, people interpret it in the sense that they are closer to the artist, closer to the aesthetics. I have no statistics, but I'm absolutely convinced that there are more professors of literature in the Anglo-American world who are writing literature themselves. There is a different concept in the French tradition but this would be topic for another long lecture. The French concept is softer, it comes from the early 19th century, from the post-revolutionary, so called "*Encyclopédistes*."

The German tradition of wanting to be scientific goes actually back to an institutional split that took first place at the University of Berlin in the 1890s. It was a quarrel about the fact whether a newly recruited professor, his name was Ebbinghaus and he was an empirical psychologist, should become a colleague of the philosophers, of the nonempirical psychologists, of the historians, of the literary critics, and so forth—and the opinion prevailed that he should *not* be part of that. The important point I want to make is that it was the initiative of the humanities in the 1890s and in the early 20th century to separate themselves from the sciences.

I will come back to this point in a moment, but before I want to mention that there was a conception of the university in the early 19th century that I find highly interesting, worth to be recycled today above all for the humanities—and it had nothing to do with the idea of scientific rigor. The person who invented this conception was Wilhelm von Humboldt, who was first a philosopher—mainly a philosopher of language—and who, when he wrote the 1811 document in question, actually was Undersecretary of State for Culture.

I want to mention three points that Wilhelm von Humboldt makes about the university at large. He does not

この「Art」という言葉を受けて、アングロ・アメリカの伝統においては人文学者が芸術家により近い存在だとか、人文学は美学に近いものだとかいう意味にとられることがあります（もちろんこれは厳密な意味においては誤解ですけれども）。統計を取ったわけではありませんが、アングロ・アメリカの文学教員には自身も創作活動をしている人が相当多いと私は強く確信しています。フランスの伝統にもまた異なる概念があるのですが、それはまた別の講演のテーマになるほど長い話になるでしょう。フランスにおける人文学の概念はもっと柔軟なもので、いわゆる「百科全書派」の考えに基づいて、フランス革命後、19世紀初頭に生じたものです。

科学的であることを目指すドイツの人文学のあり方は、1890年代にベルリン大学で起こった制度上の分裂に端を発しています。実験心理学者のエビングハウスという教授を新しく迎える際に、彼を哲学者や、実験を基礎としない心理学の専門家、歴史学者、文学批評家らの仲間に加えるべきかどうかという議論が起き、その結果、反対意見が多勢を占めました。私が強調したいのは、1890年代から20世紀初頭にかけては、人文学の側から積極的に科学と距離を置こうとしたのだということです。

この後で詳しく述べますが、19世紀初頭の大学観はとても興味深く、今日でも、とりわけ人文学の分野でリサイクルする価値があるということを先取りして申し上げておきましょう。そしてそれは、科学的厳密さの理念とはまったく異なるものでした。この大学観を考案した人物はヴィルヘルム・フォン・フンボルトです。彼はまず哲学、そのなかでも言語哲学の専門家だったのですが、これから取り上げる1811年の文書を書いた当時は文化担当国務次官を務めていました。

さて、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが大学というものの全体をめぐって提案した3つのポイントをご紹介します

draw a separation between the sciences of the spirit and the natural sciences, but I think the three points that he makes are points worthy to be remembered and recycled today.

First point and I hope you are surprised: Humboldt says that the universities in general are not institutions that should produce or recycle answers. He says that the production of answers and the transmission of answers is the main task of secondary education. This is what we do at high school. As soon as you have an answer this is no longer something that the university should promote. People at the university should produce new questions and more problems.

Then Humboldt writes about the seminar and the laboratory as teaching situations. Why is that important? I can no longer say it's important because of the transmission of knowledge because the transmission of knowledge is not the task of the university. But while Humboldt's answer is complicated to explain, I think it is surprisingly beautiful. He says the seminar and the laboratory are places where different types of enthusiasm of different generations can inspire each other, and this is why they are so productive. The professor would teach Plato—but his enthusiasm has a different flavor from the enthusiasm of the students, and the reason why they need each other is not merely that the professor transmits his knowledge about Plato to the students, but, rather, because they can inspire each other. So the university is a place where different types of enthusiasm trigger each other. I think this is unfortunately not true for most universities today, but it's a beautiful idea nevertheless, may be we'll achieve something of that kind in the next hour together.

Thirdly, and this is very astonishing for somebody who is an undersecretary of State, Humboldt says the State, on the one hand, has an absolute obligation to finance the university, but he also says that in its own interest the State has no right to ever intervene in any intellectual business. Why does an undersecretary say

しましょう。彼は精神の科学と自然科学の間に線引きをしてはいないのですが、彼の3つの提案は、今日改めて見直し、利用する価値があると思います。

フンボルトの第1のポイントは、大学というものが、一般に解答というものを生産したりそれを使いまわしたりする機関ではないということです。皆さん、驚いていただけたでしょうか。解答を出し、それを伝えていくことは中等教育の役割、つまり高校で行うことであると彼は言います。解答を得た瞬間にそれはもう大学が奨励すべきことではなくなるのであり、大学は、新しい疑問やより多くの問題を生み出すべきだということです。

次に、フンボルトは教育の場としてのセミナーや研究室について書いています。何故これらの場が重要なのでしょうか？ 知識の伝達をするためという答えはもうできません。それは大学の役割ではないのですから。彼の考えを説明するのはとても難しいのですが、驚くほど素敵な考えだと思います。セミナーや研究室は、様々な世代の様々な種類の熱意を持った人たちがお互いを刺激しあうことができる場であり、それゆえ何かを生みだすことのできる場だということです。教員は学生にプラトンを「教える」としても、教員が熱くなるところと学生たちの熱くなるところは色合いが違います。つまり、互いの存在の意義は、教員がプラトンについての知識を学生に伝達するという関係のみにあるのではなく、むしろ相互にインスピレーションを与えることができるということにある。このように大学は様々な種類の熱意が互いを刺激しあう場所なのだ、ということです。現状では、それが実現されている大学は残念ながら少ないと思いますが、それでも素敵な考えですね。あとで皆さんと一緒にこのような考えに基づいた実践ができればと思います。

第3に、フンボルトは国務次官の発言としてはかなり意外なことを言っています。国家には大学を財政的に支える絶対的義務があるとする一方で、知的活動というものに対して国家が一切干渉できないことこそが国家を利するとも言っているのです。国務次官でありながら何故そのようなことを言うのでしょうか？ 彼が言うには、

that? He says that because the university is supposed to be the institution that the State fosters in order to produce surprising knowledge, in order to produce views that nobody has still produced, so that, by definition, this will no longer be the case, if the State is allowed to intervene.

Keep Humboldt's three points in mind, while I come back for moment to the history of the humanities. If we go back to the 1890s, why is it that the humanities wanted to separate themselves from the sciences? This is actually a very long, complicated story. I will try to make it short, but we have to go back. What is new is that for the first time after the Middle Ages humans think of themselves as being eccentric to the objects of the world, as subjects who regard the world, interpret the world as an object and by interpreting the world as an object produce its representation and produce knowledge. Think of Galilei and the experiments at the leaning tower. Think also of Descartes and his definition of the ontology of human existence as "I think therefore I am." So the subject is

大学とはあっと驚くような知識、それまで誰も考えつかなかったような見方を生み出すために国家が育む制度であるはずで、国家の介入が許されるとすれば、定義からして大学は本来の使命を果たせなくなってしまうのです。

フンボルトの3つの主張を心に留めておいていただいて、一度人文学の歴史に戻ることにします。1890年代、人文学はなぜ科学から分離したかったのでしょうか？ 実際これはとても長く複雑な話です。できるだけ手短にしますが、少し歴史を遡る必要があります。中世が終わりを迎えると、新しいことが起きます。人間が、自分たちは客体としての世界の中心から外れた存在だと考えるようになったのです。世界を観察する主体としての人間が、客体としての世界を解釈し、また客体としての世界を解釈することによって、世界の表象と世界に関する知識を生み出すということになります。ガリレイのピサの斜塔の実験や、デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」という人間の存在論的な定義を考えてみてください。主体とは純粋な精神のことでした。空間内にしか存在でき





pure spirit, spiritual as opposed to the objects as that which requires space.

Then something happens in the early 19th century that complicates the situation and that has set the Western intellectual agenda or the globally intellectual agenda until the present day. This is what I call the emergence of the second order observer. Now what is the second order observer? The second order observer is an observer who cannot help observing himself or herself in the act of observation. There are two consequences. A second order observer discovers that his representation of the world or his interpretation of the world depends on his own point of view. So what emerges is the problem of perspective. With each given object of reference, you all of a sudden have an infinity of interpretations and infinity of representations. The second innovation is that the second order observer rediscovers that there are two levels of world appropriation or world interpretation. World appropriation by concepts—that is what we call experience. But there is also—and this is what early modernity had not taken into account—world appropriation by the senses—I mean physical world appropriation, that is perception of the world. And from that moment on intellectuals are obsessed with the compatibilization of both modes of world appropriation.

Needless to say that until the present day, nobody has found the solution to the second problem. And I believe that it came partly from this very frustration that in the late 19th century, the humanities took the initiative to separate themselves from sciences. It was basically a move to get rid of this problem. Ever since, science deals with world appropriation through the senses. We, the humanist, deal with world appropriation through concepts, we deal with interpretation.

This is the program of the humanities. Now, what's wrong with that? The problem is that this birth of the

ない事物とは正反対の、[物理的空間を必要としない]精神的なものだったのです。

さて、19世紀初頭になると、事態を複雑にする出来事がおこります。この出来事は西洋全体あるいは全世界的なレベルで今日に至るまで続く、知をめぐる論題を設定することになったものですが、それは、私が二次観察者の出現と呼んでいるものです。二次観察者とは、何かを観察する際に、観察する自分自身をも観察してしまう人のことです。それは2つの帰結をもたらします。まず、二次観察者は、自分がうみだす世界の表象や解釈が自分の視点に支配されていることを発見します。そこで視点の問題が生じます。参照するそれぞれの事物に対して、その解釈や表象は無限に存在するということに突然なってしまうのです。もうひとつの帰結として、二次観察者は、世界を自分のものにすること、ないし世界を解釈することには2つのレベルがあることを再発見します。ひとつは世界を概念によって自分のものにすること、これが「経験」と呼ばれるものです。しかし、それだけでなく（近代初期にはこのことが考慮されなかったのですが）、もうひとつ、感覚によって世界を自分のものにするという方法もあります。それはつまり、身体的に世界を自分のものにすること、世界を知覚するということです。この再発見以来、知識人たちは、世界を自分のものにすること、あるいは世界を認識するためのこれら2つの方法を共存させるにはどうすればよいかという問題に取り付かれています。

もちろん、今日に至るまで、この第2の問題の解答にたどり着いた人は誰もいません。19世紀末に人文科学が自ら進んで科学から分離したのは、まさにこのような葛藤からでもあったと私は思います。それは基本的に、この問題を考えることをやめてしまおうという動きだったのです。その時以来、科学は感覚を通じた世界認識を扱うものだということにし、我々人文科学者は概念による世界認識、つまり解釈を扱う、ということにしたのです。

これこそが人文科学のプログラムですが、では、どこが問題なのでしょうか？ 問題は、「精神の科学」として

humanities as “sciences of the spirit” came with the birth trauma of what you call in Germany “loss of world.” As soon as you abandon the world reference of the natural sciences, you feel that you are a little bit in the open air. You are too loose, you are too cloudy. You are not concrete enough. I think this impression is the reason why ever since the early 19th century, if you pursue the history of humanities, the humanities have been in a rollercoaster situation. There have always been moments of great interpretative inspiration, like the moment of new criticism in the mid 20th century, followed by the attempt of the humanities to become very rigorous—the 1960s are such a moment. All of a sudden, you want to become mathematically rigorous, you do linguistics, or remember the enthusiasm for certain types of Marxism, although philosophically they were as old fashioned as a dinosaur—but they promised to be rigorously scientific. This was followed by moments of greater relaxation, think of new historicism or think of the moment of deconstruction—which was then followed again by these moments of the ambition to be rigorous like cultural studies—social-scientific cultural studies or media studies. So if you’re asked to describe the technology of a T.V. set in order to do humanities research, you may feel good about yourself because you can pretend that you have not lost contact with the world.

I think the other effect of the birth trauma is that humanists, which is a kind of strange paradox, always want to be endlessly political. I sometimes cannot help asking my “politicized” colleagues the question, why—if you forgive my language—why the hell? If you want to be so political why have you chosen to be a humanist, why did you not become a politician? But I think it is precisely by default, I mean because we are traumatized—and have been traumatized for one hundred years by this world loss—that we are so paradoxically ambitious to be political.

の人文学の誕生に、ドイツで「世界の喪失」と呼んでいるような誕生時のトラウマがつきまとっているということです。自然科学的な世界参照関係を捨ててしまうと、たちまち、なんだか野外でしゃべっているような気分になります。自分が制限から自由すぎて、曖昧だと感じたり、具体性に欠けると感じたりするのです。19世紀初頭以来の人文学の歴史を辿ってみると、人文学が常にジェットコースターの状況にいるのは、そのためだと思います。大いなるひらめきに満ちた解釈をする時期、たとえば20世紀半ばのニュー・クリティシズムのような時代があると、それに続いて人文学が厳密さを志向する動きが起こります。1960年代がそのような時期でした。突如として数学的厳密さを求めたくなり、言語学がはやる。あるいは、思想的には恐竜みたいに時代遅れであったにも拘わらず、ある種のマルクス主義のようなものにかつて抱いた熱がぶり返したりします。厳密で科学的であるという約束を与えてくれたからです。それに続いて、より大きな弛緩の時期が訪れました。ニュー・ヒストリシズムやディコンストラクション時代を思い出してください。その後にはまた、社会科学的なカルチュラル・スタディーズやメディア研究のように、厳密さを志向する時期が来ました。テレビセットのテクノロジーを人文学的研究として描写せよと言われれば、安心することができでしょう。何故なら、世界とのつながりを失っていないという素振りができるからです。

誕生時のトラウマが生んだもうひとつの結果は、これはおかしなパラドックスですが、人文学者たちが常にどこまでも政治的であろうとすることだと思います。私は、「政治化した」同僚たちに向かって、何故なんだ、(言葉遣いは悪いですが) いったいどうして? と言いたくて仕方なくなることがあります。そんなに政治的でありたいなら、どうして人文学者なんかになったんだ、政治家になればよかったじゃないか、と。しかし、これはまさしく当初からの定めなのだと思います。つまり、我々は100年前からこの世界の喪失というトラウマに悩まされており、逆説的に政治的な姿勢をとりたがるのは、そのためなのでしょう。

\*

I come to my third part, and this is about the university in the present situation, and about what the humanities can do. I will precisely not go back to the rigorous concepts of “science” and of “being political.” I will actually go back to Humboldt’s ideas, and try to reactivate them for the present situation. If you ask what the university is supposed to be all about today, you will normally get two answers—one answer is that the university is supposed to transmit professionally relevant knowledge on a higher level, and the second expectation is that the university can be an agency of problem solving, it can be an agency of consulting on a very high level in fields like engineering, applied sciences, medicine, and computer science. The social sciences are pretending to do that, too, but I don’t trust too much in their success.

And the humanities? Who would need the knowledge that the humanities transmit? Only the future professors of the humanities—and that is a very small group of people. In English Departments the professors sometimes talk about the so-called “bread and butter courses”—the courses everybody should take, but I don’t think there is any knowledge in the history of English literature that everybody needs. The texts of Shakespeare are endlessly fascinating but you don’t need them if you work for Honda or for Toyota, for example, or for whichever company one day. You will not lose any of your salary if they found out that there are three history plays of Shakespeare that you have not read. Do the humanities solve problems? Not really—humanists sometimes pretend they do, but they don’t really solve problem. So what could be the function of the humanities? I hope I have stated the question dramatically enough.

\*

さて、3番目のポイントに入りましょう。現在の大学の状況について、そして、人文学に何ができるかということを取り上げます。「科学」的な厳密さという話や、「政治的態度をとる」という話には返りません。私が試みたいのは、フンボルトのアイディアに立ち戻り、それを現状に合わせて活かすことです。今日の大学の役割を問われたとき、普通に考えられる答えは次の2つでしょう。第1に、専門職に役立つ高レベルの知識を伝達すること、そして第2に、問題解決機関になること、すなわち、工学や応用科学、医学、コンピューター科学などの分野において、高レベルの諮問機関になることです。社会科学も同様のことを目指していますが、それが成功するかどうかが私にはあまり確信がもてません。

では、人文学はどうでしょうか？ 人文学の知識の伝達を必要とするのは誰でしょうか？ それは、将来人文学の教員となる学生たちのみであり、それもかなり少ない人数です。英語英文学科の教員たちは、いわゆる「バターつきパン科目」、つまり全学生が「食べ」なければならない授業があると言ったりすることがありますが、英文学の歴史を見渡しても、その中に誰が必要とする知識があるとは私には思えません。シェイクスピアのテキストは魅力あふれるものですが、たとえば将来ホンダやトヨタなどの会社に勤める際には必要ありません。シェイクスピアの史劇のうち、ある3作品を読んでいないことが会社側に知れたからといって減給されるなどということもありません。では人文学は問題解決に使えるのでしょうか？ あまりそうとは言えません。人文学者たちがそのような振りをすることも時にありますが、実のところ問題解決をしてはいません。それでは、人文学の果たしうる役割とは何でしょうか？ これまでの話から、この問かけが十分ドラマチックに響いているといえるのですが。

My answer is that the specific function that the humanities could have of the university should be what I call riskful thinking. Now what do I mean by riskful thinking? I mean in the first case, very much inspired by Wilhelm von Humboldt, that riskful thinking is the thinking that produces questions instead of answers. Riskful thinking is a thinking that makes the world look more complicated and less solution-oriented. Riskful thinking is a thinking that produces alternative world views instead of catering to existing world views. Instead of reducing, riskful thinking tends to increase the complexity of the world by creating new problems.

Let me give you two examples for riskful thinking—one is relatively banal but it normally helps to understand. Imagine that, after this lecture, you have a horrible stomach ache, and you first think it's because of this lecture, but it is not, you go to your doctor and he tells you, well Mr. Ishii, you have appendicitis, please go and see the surgeon. So you go and see the surgeon and the surgeon schedules you for surgery tomorrow morning. Then, in the morning, you see your surgeon and he says: Mr. Ishii I congratulate you because you will be the first patient on whom I will try out a new access to the appendix. You wouldn't like that because this would be riskful thinking practiced on you. You want innovations to happen, but you don't want the surgeon to try that out on you. This is why you want that there be clinical research and basic research, that there be a certain institutional space where this risk can be taken. You don't want everyday institutions to get congested by riskful thinking. Risks are not good for everyday situations—but you want one institutional space where they can happen.

The second—more sophisticated—example goes back to the first visiting professorship that Jacques Derrida had in Germany in 1988. 1988 was a moment when, once again, there was a worldwide discussion in the humanities about Martin Heidegger's biography. You know that

私の答えは次の通りです。大学において人文学が果たすべき役割は、私が「リスクフル・シンキング」と呼んでいるものです。リスクフル・シンキングとはどんなものでしょうか？ まず、これはヴィルヘルム・フォン・フンボルトの影響を強く受けているのですが、リスクフル・シンキングとは、解答を出す代わりに問いを生み出すような、解答志向を緩和し、世界をより複雑に見せるような思考の形です。既存の世界観に囚われず新しい世界観を生み出す考え方です。リスクフル・シンキングは、新しい問題を生み出すことを通じて、世界の複雑さの度合いを弱めるのではなく、むしろ強める方向性をもっています。

リスクフル・シンキングの2つの例を挙げましょう。まずひとつ、ありきたりだけれどもわかりやすい例です。さて、想像してみてください。この講演の後、あなたはひどい腹痛に襲われる。はじめは講演のせいだと考えるけれども、そうではない。医者に行くと、こう言われる。石井さん、虫垂炎ですね、外科に行ってください。そこで外科に行くと、明日の朝手術しようということになり、朝になると外科医から次のように言われる。石井さん、おめでとうございます。あなたは、私が新しい方法で虫垂炎の手術をする患者の第1号ですよ。あなたはイヤだと思う。リスクを伴う考えがあなたを用いて実践されることになるからです。技術・学術の革新は進んでほしいけれども、自分がその外科医の実験台になるのはイヤだ。そこであなたは、臨床研究と基礎研究というものがある欲しい、つまりリスクを冒すことができる特定の制度的な空間が別に存在して欲しいと思うのです。日常的な制度の中でリスクフル・シンキングが横行するのは喜ばれません。リスクというのは日常的な場においては好まれないものであり、リスクを冒せる制度的な場がそれとは別に求められるのです。

さて、2番目のより高級な例です。1988年にジャック・デリダが客員教授として初めてドイツを訪れた際の話です。1988年は、マルティン・ハイデガーの伝記的事実をめぐる人文学界に世界レベルの議論が巻き起こった年です。ご存知の通り、この偉大なドイツの哲学者は

this great German philosopher was also a member of the Nazi party until its end in 1945 and, as such, a president of the University of Freiburg. Derrida said, in passing, that Heidegger was the greatest philosopher of the 20th century. I don't know whether he is right or wrong, but that's what he said, and then a student asked: Professor Derrida, how can you say that Heidegger was the greatest philosopher of the 20th century, don't you know that he was involved into Nazi ideology? Derrida gave him an answer that was a beautiful example for riskful thinking. The answer gives me gooseflesh, because after all I was born in Germany in 1948, but this answer definitely is a great example for riskful thinking. Derrida said, young friend, of course I know that Heidegger was a Nazi. We all know that. That is not the question. The question is whether he could have been the greatest philosopher of the 20th century without being involved into Nazi ideology. I hope until the present day and I believe the answer is—yes, Heidegger could have been a great philosopher, and maybe even a greater philosopher without being involved into Nazi ideology. But my point is that there has to be one place in society where even this question can be asked. I don't think that it would be a good question for the public sphere, or for TV. I don't think this would be a good question for a high school, but there has to be one place where even this question can be asked, and I think this should be the university, the humanities in specific. For this very reason it is positive that universities are up to certain degree isolated from society. Everybody complains about the fact that the universities are what we call an ivory tower, but I think it is something positive—because it is precisely this ivory tower quality what avoids that riskful thinking permeates into everyday life outside the university and congests everyday it.

Now, why do societies need and finance riskful thinking? If it were only for people like myself to have

1945 年ナチの終焉までその党員でもあり、ナチの一員としてフライブルク大学の総長を務めていました。デリダは、ハイデガーが 20 世紀で最も偉大な哲学者であると、ちらりと口にしました。私にはこの意見が正しいかどうかわかりませんが、とにかく彼はそう言ったのです。すると、ある学生が質問しました。「デリダ先生、ハイデガーが 20 世紀で最も偉大な哲学者だなんて、よくそんなことが言えますね。ナチのイデオロギーに加担していたことをご存知ないのですか?」と。それに対するデリダの答えは、リスクフル・シンキングの見事な例となるものでした。その答えを思い出すと私は鳥肌が立ちます。なにしろ私は 1948 年のドイツに生まれたのですから。とは言え、デリダの答えはまさしくリスクフル・シンキングの偉大な手本だと思います。彼の答えはこうでした。「私はもちろんハイデガーがナチだったと知っています。誰もが知っていることです。問題はそこではないのですよ。問題は、果たして彼が、ナチスのイデオロギーに与することなしに 20 世紀で最も偉大な哲学者になり得たかどうかということなのです。」私は、ハイデガーがナチのイデオロギーに加担しなくても偉大な哲学者でありえたはずだと、そして、おそらくは加担していなければもっと偉大な哲学者だっただろうという答えを今日でも望んでいますし、そう信じています。けれども、私が主張したいのは、社会の中でこのような質問が許される場がひとつあるべきだということです。このような問いは、公共の場ないしテレビにはむいていないものだと思います。高校でなされるべき質問でもないでしょう。唯一、この問いを発することが可能な場所が大学であり、その中でも人文学なのだと思います。まさにこの理由によって、大学が社会からある程度隔絶されていることは肯定的な意味を持つのです。誰もが口をそろえて、大学がいわゆる象牙の塔であることに不平をこぼしますが、私はむしろ肯定的な側面があると思います。というのも、まさしく象牙の塔のような特性のおかげで、リスクフル・シンキングが大学外の日常生活に広がって行かないようにすることができるからです。

では、何故社会というものにはリスクフル・シンキングが必要なのか、何故社会がそれに出資するのでしょうか

fun, that wouldn't be good enough. The reason is that—to have a repertoire or a pool of alternative views will give societies and cultures flexibility for change. I am not saying that the humanities must propose in which direction societies should go, but they should work against an ossification of society. They should develop pools of alternative views of what life could be and they should train as much as possible future members of the society in this sense, not only future humanists. The humanist should become the specialists for seeing the world in a more complex way.

How is riskful thinking different from a scientific rigor? My first point out of four is that riskful thinking is not compatible with method. For riskful thinking relies on momentaneous inspiration and if you rely on the method you will kill the momentaneous inspiration, you will not even allow yourself to have such inspiration. Secondly—and this is just an expansion of my first point: riskful thinking means that you pay attention to your own intuitions. You argue and in argument you may develop theories but you are never convinced then you are ultimately right. I would actually go so far to say that the key quality criterium in the humanities is not to be right or wrong—because in the humanities except for very few questions there is never final evidence. The ultimate criterium for quality in the humanities is to spark controversy—and that this is what the humanities should indeed do. They do not produce solutions, they do not make the world necessarily better. The humanities produce ongoing conversation. This is different from the natural sciences. If you hire a colleague for physics, you do not necessarily want to hire a colleague whose work produces the most controversies. You want to hire somebody who has discovered something new that is now proven right—and who is a candidate for the Nobel because it is proven right. In the humanities, however, I think those who are always proven right, look boring

か？ もし私のような人間たちの楽しみのためだけだとすれば、それは十分な理由にはなりません。ではその理由はというと、取り得る選択肢のレパートリーあるいは蓄えが豊富にあれば、社会と文化が、変化に対する柔軟性を持つことができるはずだということです。私が言いたいのは、人文学が社会の行くべき方向を示さねばならないということではなく、人文学は社会の硬直化を防ぐべきだということです。人文学は、世界の動向をめぐる様々な視点の蓄えをつくるべきであり、その方向で、未来の人文学者に限らず未来の社会の一員をできる限り鍛えるべきです。人文学者は、世界をより複雑な見方で見ることの専門家になるべきなのです。

リスクフル・シンキングと、科学的な、厳密な考え方にはどのような違いがあるのでしょうか？ 4つあるポイントのうちの1つ目は、リスクフル・シンキングが方法というものとは相容れないということです。というのも、リスクフル・シンキングは瞬時のひらめきに拠るところが大きいのですが、方法論に頼るとそれを駄目にしてしまい、そのようなひらめきを得ることが許されなくさえてしまうからです。2つ目は、1つ目のポイントの続きですが、リスクフル・シンキングでは、自分の直感に注意を払わなくてははいけません。たとえば、議論をし、その中で自分なりの理論を展開するときに、自分が究極的に正しいのかどうかということには確信が持てないまましているとします。実際、人文学における評価基準の鍵になるのは、正しいか否かということではないとまで、踏み込んで申し上げておきましょう。人文学においては、ごく僅かな例外を除いて、決定的な証拠などないからです。人文学における評価の基準は、議論に火をつけることができるか、ということです。それが人文学の役割なのです。何かを解決するのでもなく、必ずしも世界をより良いものにするわけでもありません。人文学は先へと続いていく議論を生み出すものです。ここが自然科学と違う点です。物理学者を雇うときには、必ずしも物議を醸す研究をするような人を選ぼうとはしないでしょう。何か新しいことを発見し、それが正しいと証明され、正しいことを発見したということでノーベル賞の受賞候補者になる、そんな人を雇いたいと思うはずで

because they never spark controversy.

Thirdly, I think the humanities hardly ever do research in the sense of large scale investigations. Likewise, they hardly ever do research in the sense of making prognosis about the future. The humanities are sometimes expected to do that—but I cannot see the usefulness of it. Rather, the humanities are about judgment. Judgment very much in the sense of Immanuel Kant, which always implies the moment of decision. You can never make a completely rational judgement. You can never make a judgment completely by deduction. This is why we can say that, in the legal system, certain judges are more competent than others. Of course, there has to be a body of laws, of course there has to be a jury, of course there have to be all kinds of resources that try to prevent judges from making bad judgments, but ultimately there is a moment in which every judge has to make a decision, and I think this is no different from the humanities—for the humanities are not primarily about inductively or deductively producing rock solid results. The humanities are about the capacity of judgment, and the effect of your judgment is to produce plausible or convincing results.

Finally and this is about the the sociology of the humanities: I think the humanities can be called an “art” in the sense of being a craft. How can you teach riskful thinking? How can you teach the humanities? I think you cannot really teach the humanities by giving recipes, by giving methods, you can only teach the humanities by example. The best way of learning in the humanities is to sit with people around a table—and see how some people go about history, about philosophy, about science. Some just do that better than others and you slowly begin to imitate them—not to copy them. For you are inspired by them and this is why I think that we need teaching situations in a shared space, teaching in co-presence. You all know what it is like to remember some great inspiring teachers

しかし人文学では事情が異なります。いつでも正しくて議論の余地のないことを言う人は、議論を引き起こすことが決してないため退屈だからです。

3つ目に、人文学は大規模な調査という意味での研究をすることは少ないと思います。未来を予測するような意味での研究をすることもほとんどありません。人文学にそれが求められることもあります、私にはその意義が理解できません。人文学はむしろ、判断力に関わる学問です。ここで言う判断力とはイマヌエル・カント的な意味であり、そこには常に決断が下される時があるという含みがあります。完全に合理的な判断をすることなどできません。完全に演繹のみによって判断をすることはできません。法的なシステムにおいて裁判官の能力に優劣がありうるのはこのためです。もちろん、法体系や陪審制度を始めとして、不適切な判断を避けるためのあらゆる仕組みがなければいけないわけですが、最終的には裁判官が判断を下さなければならない時があり、これは人文学と同じだと思います。というのも、本質的に、人文学は帰納的あるいは演繹的な方法によって堅固で確実な結果を出すというものではないからです。人文学は判断の能力に関わるもの、すなわち、なるほどと思わせる、説得力のある結果をあなたの判断が導きだせるかどうかということに関わるものなのです。

最後に、人文学についての社会学の話をしましょう。私は、人文学は「職人芸」という意味での「芸術」だと思っています。リスクフル・シンキングを教えるにはどうすればいいのでしょうか？ 人文学を教えるにはどうすればいいのでしょうか？ レシピ（手引書）を伝えること、方法論を伝えることによって人文学を教えることはできないと思います。人文学を教える唯一の方法は、例を示すことです。誰かから人文学の何かを教わるための最良の方法は、机を囲んで人と一緒に座り、ほかの人が歴史や哲学や科学についてどのように研究しているのかを聞くことです。その中により上手な人がいれば、その人たちの振る舞いを真似ることからまず始めるのです。そっくりそのまま写すわけではありません。その人たちからひらめきを得ることだからです。そして、このことが理由

that you had. Now if you think about what you learned from them, I think this is very often hard to say. You may remember certain points, but you really learn by example like you learn in a workshop from a great carpenter or from a great artist, think of the Renaissance artist, think of traditional Japanese theater for example. I don't think that Kabuki families have recipes that they pass along.



\*

Under these conditions—what are the major challenges? What are the major problems for the university in the future—and do the humanities have a place in the university of the future? I will take this question very seriously. Let me then first of all talk about two tendencies that I believe will profoundly change in the university of the future. You probably all know and if you do not know you should know that the cost for teaching in spatial co-presence is exponentially growing today. It grows much faster than the income growth in any economy. For example a Stanford undergraduate student, today, pays roughly 50,000 per year to his university—but the cost for every Stanford student per year is multiply higher. This means that distance learning will be the great solution of the future, to an extent that we cannot even imagine today. About a year ago, Stanford, Yale, and Princeton joined in a consortium for

で、空間を共有した状態で教えること、同じ場に居合わせる状態で教える状況を私は重要視しています。これまでに皆さんが習ったことのある、ひらめきを与えてくれるような偉大な先生のことを思い出してみれば、それがどんな経験だったか、おわかりのはずです。しかし、では一体何を習ったのかと聞かれたら、答えるのはまず難しいでしょう。こんなことがあったという特定のポイントをいくつか思い出すことがあるかもしれませんが。例からしっかり学ぶというのは、実際の作業場で偉大な大工や芸術家から学ぶようなものです。ルネサンスの芸術家たちや日本の伝統芸能を考えてみてください。歌舞伎役者の一門の芸は、手引書によって伝えられていくものではないでしょう。

\*

さて、これらの状況を踏まえた上で、いくつかの主要な課題を考えてみましょう。未来の大学にとっての主要な問題とは何でしょうか？そして、未来の大学に人文の居場所はあるのでしょうか？この問題について真剣に考えてみたいと思います。まず、未来の大学において大きく変容するだろうと思われる2つの傾向についてお話ししましょう。ご存知かもしれませんが、そしてそうでなければ知っておいた方がいいことですが、同じ空間に居合わせるような従来の形態の授業をするためのコストは今日急激に増加しており、それは収入の増加に比べてずっと急激なのです。たとえば、スタンフォードの学部生は年間およそ5万ドルの学費を納めていますが、学生1人ひとりにかかる費用はその何倍も多いのです。つまり、未来の大学においては、遠隔学習が今日では想像もできないほどに重要な解決案になるだろうということです。実際、1年ほど前に、スタンフォード、イェール、プリンストンの3大学が遠隔学習の学校共同方式に



distance learning and you'll probably soon be able to buy any Stanford degree, Princeton degree, Yale degree for \$10,000 per year, instead of \$50,000—and lots of people will use that opportunity.

If you feel like I feel, i.e. that what universities really are all about are these situations of spatial co-presence, then I will recommend you in the first place a certain commitment. Do not engage too much in distance learning because the more we do it, the more we contribute to the disappearance of what we all like. But I also urge you to do some research about what specifically the virtues and functions of learning in co-presence are, and why it is much more productive to discuss with people sitting around a table than to do that by e-mail. I think most of us share this intuition, but I want to remind you that we do not really know why this is so and we may run out of time if we don't have answers to these questions soon. I think the greatest threat for the university as we know it and especially for the humanities, is electronic learning and distance learning and we should at least not be enthusiastic about that.

The second threat for the university as we know is actually an undermining of the second, the problem-solving function. There is a strong tendency in corporations—especially in Japan—to develop research in this direction, I don't think that there is anything evil about this but if the university as we know it will be replaced by distance learning on the one side and will not have this consulting agency function on the other side, this would most likely be the end of the humanities. One might of course also think that if this happens, if distance learning takes over and problem solving leaves the university, what the humanities can do, namely riskful thinking, will become much more central. We might even imagine that the universities will shrink as institution but could become again something like Aristotle's Lyceum or Plato's Academy?

加わりました。そのうちにスタンフォード、プリンストン、イエールのあらゆる学部の学位を、年間5万ドルではなく1万ドルで取得できるようになるでしょう。たくさんの人がこのチャンスを利用することになると思います。

もし、空間の共有という今申し上げた環境こそが大学の本質だという私の考えに共感してくださったら、まずはひとつ約束のようなものをして下さい。遠隔教育に従事し過ぎないようにすることです。遠隔学習に専心していれば、我々が大切にしているものを消滅させることにつながってしまいます。また、空間を共有した学習の利点と機能が何なのか、電子メールによるやりとりよりも机を囲んで議論するほうがずっと生産的なのは何故なのかも研究してみてください。この直感は多くの方々に共有していただけるものだと思いますが、その明確な理由が我々にはまだよくわかっておらず、答えを出すのに手間取ってはいは手遅れになってしまうかもしれないということを心に留めてください。今日我々が知っている形の大学、なかでも人文学に対する最大の脅威は、電子媒体を通じての学習、遠隔学習だと思います。そして我々は少なくとも、それに熱狂してはいけないと思います。

今日の大学に対する2つ目の危機は、専門知識伝達に次ぐ機能である問題解決機能が脅かされていることです。企業のあいだには、特に日本において、そのような研究を進めるはっきりした傾向が見られます。それがよこしまなことだとは思いませんが、もし一方では今のような形の大学が遠隔学習に取って代われ、問題解決の諮問機関としてのこの機能を持たないとなれば、その時はもう人文学というものはほとんど終わりだといえるでしょう。もちろん、そうした事態になれば、つまり大学が遠隔学習に取って代われ問題解決機能もなくすとしたら、人文学の役目、すなわちリスクフル・シンキングがより重要になるかもしれないとお考えになるかもしれませんが、そうなることと機関としての大学がかなり縮小することを予想することさえできるかもしれませんが、果たしてアリストテレスのリュケイオンや、プラトンのアカデメイアのような形に戻れるのでしょうか？

Now, in concluding, I want to give you two examples about future-oriented thinking in avant-garde institutions in which I have been involved. The first example is my own institution, Stanford University, which has just launched a few months ago the largest fund raising campaign in the history of the university. Its official goal is \$4.7 billion but the real goal is over \$6 billion, and it will certainly be reached within three years.

What will the University do with all that capital? There is a very strong tendency to do whatever it can do to keep the consulting function at the university. For example, Stanford has just spent half-a-billion dollars for a completely new building called Bio-X, which is supposed to have the most advanced lab spaces in the world and will actually not only be for professors. It will be open for researchers from corporations to collaborate with Stanford professors. A second project is somehow uncanny but even more interesting. It is to transform the department of political science into a hub for international political consultation. Stanford is in the process of hiring not only political scientists, but a number of successful former politicians for this project where governments from all over the world, not only the American Government, could seek advice.

A large amount of the money to be raised will go into the humanities and arts, but actually not into what we traditionally consider the humanities, but rather into the “practical” arts indeed. Much money will go into studio arts, a huge amount will go into the installations for a conservatory. But what happens with the more traditional humanities—what happens with philosophy? What happens with history? What happens with literary studies and so forth? We asked our university president, who is a computer scientist, whether this was part of his plan, for the humanities to disappear. The president’s answer was that, as it costs money to raise money, the potential projects for the humanities are just not

さて最後に、私自身も関わった、2つの前衛的な組織における未来志向型の考えの例を挙げたいと思います。ひとつ目の例は私の所属するスタンフォード大学です。スタンフォードは数ヶ月前、大学創立以来最大の資金集めキャンペーンを始めました。公式の目標は47億ドルですが、本当の目標は60億ドルで、3年のうちにそれを確実に達成することができるでしょう。

大学はこれほどの資金を使って何をするつもりなのでしょう？ 大学には、諮問機能を保つためのあらゆることをしようという傾向が強く見られます。たとえば、スタンフォード大学はBio-Xと名づけた最新式の建物に5億ドルを注ぎ込みました。それは世界でも最先端の実験スペースになるはずですが、大学教員ためだけのものではありません。外部企業から派遣される研究者たちにも開かれていて、そこではスタンフォードの教員たちとの共同作業が行われるのです。もうひとつのプロジェクトは、少し突飛ではあるけれども、より面白いものです。それは、政治学科を、国際政治に関する諮問の中枢機関にしようという計画です。スタンフォードは、政治学者に限らず、有能な政治経験者を多数雇い入れ、アメリカ合衆国政府だけでなく世界中の政府が助言を求められる場にしようとしています。

今回集められる資金から、大量の金額が人文学部(humanities and arts)に入ってくるでしょうが、実際は伝統的に「人文学」と考えられている部分ではなく、「実践」芸術の方に当てられるでしょう。巨額の資金が芸術のアトリエや、芸術学科の設備に投入されるでしょう。しかし、伝統的な人文学の方はどうなるのでしょうか？ 哲学、歴史学、文学研究などの学問は、どうなるのでしょうか？ 私たちは学長に、これは人文学の消滅という彼の計画の一部なのかと質問しました(彼自身はコンピュータ科学の専門家です)。学長の答えは、資金を集めるにもコストがかかる一方で、人文学が計画しているプロジェクトは資金集めコストに見合うだけの十分な額でないというものでした。そこで、スタンフォー



large enough in their financial volume. So Dr. Ishii, a Stanford alum, and I invented the “peanuts paradox”: the university is immensely rich, the university clearly likes the humanities, but the humanities will not appear in the most important document that the university will produce for the future and this implies the risk that in the next generation they will not figure it. I’m not saying it is bound to happen. It could happen.

The other example—and this also is a paradoxical example—is the recently founded university of the Volkswagen corporation. Japanese readers will be happy

ド同窓会員である石井さんと私は、「ピーナッツ [小額]・パラドックス」という言い方を思いつきました。つまりスタンフォード大学はとてつもなく裕福で、且つこの大学にとってももちろん人文学は大事だけれども、この大学の将来像が描かれるだろう最重要文書には人文学が登場しない。これは、次の世代になると人文学が大学の一部として判りやすい姿形をもたなくなるというリスクがあることを示唆しています。そうなる運命にあるとまでは言いませんが、ひょっとするとそうなる可能性はあるかもしれません。

もうひとつの例は、これも逆説的なものですが、フォルクスワーゲン社が最近設立した大学です。フォルクスワーゲン、セアト、アウディ、シュコダなどのブランド

to learn that VW is only the third largest car producer in the world, with a number of brands like Volkswagen, SEAT, Audi, Skoda and so forth. While the idea for this university was strictly geared to the improvement of VW products, every single major, every single Ph.D curriculum that's planned for this university is required to have up to 30% of its classes in philosophy, literature, history and so forth. Behind that is the belief that an engineer, a designer, a marketing specialist that is capable of what I call riskful thinking will make for a better designer, a better engineer and a more successful marketing specialist, whereas somebody who does not have this riskful thinking is doomed to have a tunnel vision of his own activity. So this was the glorious project of Volkswagen University, but to end on a sad note, the CEO of Volkswagen who was pushing that university and he was somehow the godfather of the project, Mr. Hartz, got fired four months ago—and if you want to know why he got fired you can ask me in the discussion.

があるにも拘らず、フォルクスワーゲングループが世界第3位の自動車メーカーに過ぎないと申し上げると、日本の読者は喜んで下さるかもしれませんね。さて、この大学の理念は、フォルクスワーゲングループの製品の向上という方向を正確に向いています。しかしその一方で、この大学でそれぞれの専攻、それぞれの Ph.D. の課程を修めるには、履修科目のうち 30% まで哲学や文学や歴史などの授業をとることが必要なのです。その背景には、エンジニアやデザイナー、マーケティングの専門家は、私がリスクフル・シンキングと呼ぶものができれば、より優れたエンジニア、デザイナーとなり、マーケティングのより有能な専門家ともなるけれども、リスクフル・シンキングができなければ自分の活動について偏狭なビジョンを持つ運命になるだろうという、そんな信念があります。さてこれがフォルクスワーゲン大学の輝かしいプロジェクトだったのですが、これには悲しい結末があって、この計画のゴッドファーザー的存在でありその大学を後押ししていたフォルクスワーゲンの最高経営責任者、ハルツ氏は4ヶ月前に解任されてしまいました。解任の理由を知りたいとお思いになったら、これから始めるディスカッションの中で質問してください。

## Questions and Answers

**Q:** Does “riskful thinking” in the humanities mean that, in the future, we should no longer read classical authors? After all, highly canonized texts and their analysis seems to be a low-risk operation.

**A:** I am grateful for this question, because it allows me to correct a misunderstanding that my argument and its emphasis on “riskful thinking” may have created. For, counter to the quite plausible implication of your question, I believe that, from multiple perspectives, there is a strong affinity between “riskful thinking” and the re-reading the classics. For several decades now (and those were unfortunately decades that I already spent in the profession as a humanist), our disciplines have not only spent (and I believe: wasted) much time on trying to imitate the sciences, with their insistence on “rigorous methods.” They have also believed that it was an intellectual obligation to go “against the grain” of the

**Q:** 人文学の「リスクフル・シンキング」を進めると、ゆくゆくは古典作品をもう読まなくなるということになるのですか？ 定番（カノン）となっているテキストを分析するというのは、やはりリスクの低いことのように思われるのですが。

**A:** ご質問ありがとうございます。私の議論から、また「リスクフル・シンキング」を強調したことから生じてしまったかもしれない誤解を訂正するためのいい機会になります。そのようにお考えになるのはごもっともなのですが、私は、「リスクフル・シンキング」と古典作品の再読の間には様々な意味において強い親和性があると思います。過去数十年の間（運の悪いことに、それは私が人文学者として過ごした数十年なのですが）、我々の学問は科学を真似し、「厳密な方法論」に執着することを真似ることに多くの時間を（しかも無駄に）費やしたばかりでなく、定評のある文学の定番（カノン）作品に反旗を翻し、審美的な価値が比較的低いようなテキストを読むことを勧めるのが知識人の責務だと考えられてき



established literary canon—and to emphasize the reading of texts of a comparatively low aesthetic quality (there is even a term for that in German: “Trivialliteratur”). To give you an example: my daughter Sara (who, today, is 24 years old and just finished her studies in Sociology at the University of Barcelona) went to a Spanish/German high school in Valencia. In her Spanish classes over the years, she read the classical texts of Spanish literature from the Middle Ages up until the present day. Those courses were not always exciting—but they gave her the chance of a lifetime to go back to some of the most amazing texts of Spanish and of Western culture at large. In her German classes, by contrast, some of the teachers clearly tried hard to be intellectually “progressive”—and I fear that they might even have used the concept of “riskful thinking” had they only been aware of it. Unbelievably, however, they did not read a single text from the canon of German literature, not even Goethe’s *“Faust”*—the equivalent of Cervantes’s *“Quijote”* in Spanish literature.

But why do I believe that canonized texts will indeed enhance “riskful thinking?” In the first place, because they typically challenge readers with their specific degree of complexity, both in the semantic and in the formal dimensions, that is quite comparable to the complexity of the most difficult philosophical texts—and of course I am referring to a complexity, here, that everyday institutions simply cannot produce. More specifically, let me remind you that classical texts almost always come down to us with the aura of a tradition of great interpretations (interpretations that not so seldom have achieved a certain degree of “canonization” themselves). Under these conditions, each new, each contemporary interpretation, is confronted with the challenge of finding something new—of entering into a competition with the great readers of the past—and I think it is this kind of competition that quite naturally produces a style of thinking that we may well call “riskful.”

ました（ドイツ語には、「Trivialliteratur」（平凡文学）という用語さえあります）。一例を挙げるならば、私の娘のサラは現在24歳でバルセロナ大学の社会学部を卒業したところですが、彼女が通っていた高校は、バレンシアにあるスペイン語／ドイツ語のバイリンガルの学校でした。スペイン語のクラスでは、数年かけて中世から現代に至るスペイン文学の古典的名作を読んでいました。この授業はいつも刺激的だというわけではなかったようですが、おかげで彼女はスペイン・西洋文化全般の中でも最も素晴らしいテキストのうちのいくつかを読み直す千載一遇のチャンスを得ることができたのです。一方、それと対照的だったドイツ語の授業では、一部の先生たちの「進歩的」知識人であろうという努力が明らかに見てとれました（「リスクフル・シンキング」の概念を知っていれば、それを使ったかもしれないとさえ思います）。信じがたいことに、その授業ではドイツ文学のカノンのな作品を一切読んでいないのです。スペイン文学における『ドン・キホーテ』と同様に重要な作品、ゲーテの『ファウスト』さえも。

さて、カノン化されたテキストが「リスクフル・シンキング」を助けると私が考えるのは何故でしょうか？

まず、古典作品はたいてい意味と形式の両方のレベルでそれぞれが有する複雑さによって読者に挑戦を強めます。それは、最も難しい類の哲学テキストの複雑さと比べうるようなものです。ここで私が言っている「複雑さ」とは、日常の慣習のなかでは生じないようなものという意味です。もっと具体的に言うなら、古典テキストは常にそれを取り囲む偉大な解釈の伝統とともに伝えられるということも思い起こしてください（それらの解釈は往々にしてそれ自体もある程度「カノン」化されるものです）。こうした条件のもとで新しい解釈、現代的な解釈をしようとすれば、何か新しいことを見つけ、過去の偉大な読み手たちとの競争に参入するという難問に立ち向かわねばなりません。このような競い合いによって、自然と「リスクフル」と呼べるような思考のスタイルが生まれるのだと私は考えています。

**Q:** In your argument, you gave the impression that what you understand as the main activity of the humanities is mainly confrontation and a constant revisiting of great texts and works of art from the past. I am asking myself whether you mean—implicitly, at least—that the teaching of writing, those courses that you call “composition” in the Anglo-American tradition, has a lesser priority?

**A:** It was certainly not my intention—not even indirectly—to question the importance of writing competence for a cultivated mind—and, thereby, the importance of composition classes. But I fear your intuition is correct, nevertheless—in the sense that I have a tendency to underestimate the importance of this component. Why is this so? It may have to do with a certain “romantic” tradition of the German academic world in which I was brought up—i.e. the tradition of trying to tease out the individual writerly talent in each student, instead of emphasizing certain shared criteria, forms, and patterns of “good writing.” As you probably know, it is a—somehow problematic—decision, even at the best American universities, to leave the teaching of writing for undergraduate students (and the correcting and commenting on their writing samples) largely in the hands of advanced graduate students. Sometimes, when I see composition papers written by undergraduates and corrected by graduate students, I fear that the strong belief among the graduate students in certain conventions may stifle individual talent for writing. And of course such individual talent for writing, and, above all, the liberty to let an individual style emerge, has, once again, an affinity with “riskful thinking.” From the undergraduate student’s perspective, it may indeed be “riskful” in the literal sense of the word. For they know that they are better off, grade-wise, if they write along certain patterns. This is all the sadder and counterintuitive, somehow, as the speakers of English in general (and of American speakers of English, in particular) have a wonderful and very encouraging

**Q:** お話によれば、人文学の主要な活動は過去の偉大なテキストや芸術作品と向き合い、それを再考し続けることだと考えていらっしゃるような印象を受けました。それに比べて、アングロ・アメリカの大学で「composition」と呼ばれる作文の授業の重要性は低いとおっしゃりたいのではないかと、少なくとも暗にそうおっしゃっているのではないかと思ったのですが、いかがでしょうか？

**A:** 教養人にとって文章を書く能力が重要であるということに疑いを挟む意図は、まったく（間接的にも）ありませんでした。作文の授業の重要性についても同じことです。しかし、あなたの直感は正しいのだと思います。それは、私が作文の授業をあまり重視しない傾向にあるからです。それは何故でしょうか？ 私が育ったドイツのアカデミックな世界の「ロマン派的」伝統と関係があるのかもしれませんが。ドイツには「よい文章」の一般的基準や形式、パターンを教えるのではなく、それぞれの学生個人が持っている作文能力を引き出そうとする伝統があるのです。ご存知かもしれませんが、アメリカでは、名門大学においてさえ、学部生の作文の授業をし、学生の書いた文章を添削したりコメントしたりするのは大学院生の手概して任されるという（いささか問題を孕んだ）慣例があります。ときどき私は、学部生が書いた文章を大学院生が添削したのを見て、大学院生たちが強く信じているようなある種の慣例のせいで、それぞれの学部生が持っている作文能力が制限されてしまうのではないかと心配になることがあります。そしてもちろん、このような個人の作文能力を引き出し各自のスタイルが生まれることを促す自由にもまた「リスクフル・シンキング」に通じる部分があるのです。学部生の視点からすれば、それは文字通りの意味で本当にリスクに満ちたものになるかもしれません。というのも、彼らは何らかのパターンに則って書いたほうが良い成績を取れることを知っているからです。しかし、それは悲しいことであり直感に反することです。というのも、英語話者は一般に（そのなかでもアメリカ人の英語話者は特に）、英語で「自分自身の声」を見つけなければならない人たちに対して勇気を与えてくれるような素晴らしい柔軟性と寛容さを



flexibility and generosity towards those who still have to find “their voice” in English. Let me give you a personal example. In a recent review of one of my books originally written in English, I read the following sentence: “One oftentimes has the impression that the author’s English is slightly ‘off’—but this makes the particular charm, and sometimes even the particular beauty – of this text.” Forgive me such blatant narcissism—but if all those who taught writing and composition were as generous and encouraging as my reviewer, I would be even more in favor of multiplying the writing and composition courses in our graduate curriculum.

By the way, I can see a similar problem in a certain teaching style among (mainly analytic) philosophers in the United States. Their main emphasis often seems to be to teach their students to “reconstruct” the rational argument of a text (with some modification, of course), but each text (each canonical text, at least) should have one such “rational argument” that one can identify and describe as long as one follows the method. As in the case of finding one’s own writing style (“one’s own voice”), but for the opposite reasons, I have my problems

備えているからです。私自身の例を挙げますが、最近私が英語で書いた本の1冊についての書評に次のようなコメントがありました。「この著者の書く英語はわずかに『外れて』いるような印象を受けることがしばしばあるが、それがこのテキストの独特の魅力を生み出しているものであり、それが独特の美となることもあるのだ。」このような図々しいナルシズムを大目に見ていただきたいのですが、もし作文の授業を持つ教員が皆、この書評者のように寛大で人を勇気付けるような態度であったなら、大学院のカリキュラムにも作文の授業を増やすことに私も賛成するでしょう。

ところで、同様の問題はアメリカの大学の（主に分析的な）哲学の教員の教授法にも見られると思います。彼らの授業は、あるテキストの合理的な議論を（もちろん幾らかの変更を加えて）「再構築」するのを主眼にすることが多いようですが、そこでは、すべてのテキストには（少なくともカノン化されたすべてのテキストには）方法論さえ辿れば誰も見分けることができ、表現することができるような唯一の「合理的な議論」があることが強調されます。独自の文章のスタイル（「自分自身の声」）を見つける場合と同様、しかし逆の理由から、こ



with such pedagogical exercises, because I think that the complexity of the great philosophical texts should be a challenge to work through, both for students and faculty—because this, in the end, would help to develop and strengthen personal style, rather than domesticating thought in an all-too-general and common direction. In a recent class on Plato, for example, I discovered that what most fascinates readers of the generation of 20-year olds is very different both from my present understanding of Plato, and from my Plato-readings almost forty years ago. Such diversity, too, should be developed and strengthened wherever we have a chance.

But let me conclude this answer by emphasizing that, despite the legitimate expectation that the humanities teach certain forms of competence (for example: writing competence), the function and true reason for being of the humanities is certainly not the transmission of skills and knowledge. Rather, I believe that the transmission of knowledge is a side-effect that we gain in the humanities. And while I think that, in the long run, the contribution of the humanities to life in modern societies is considerable, we would perhaps be better off if we admitted more willingly—and enthusiastically—that, after all, the humanities are a luxury operation. Doubtlessly, societies without the humanities would easily survive (in this sense, it is not only inadequate, but strategically inept, to try to justify the existence of the humanities by some practical usefulness). But what they do best—and what they do only if we emphasize the concept of “riskful thinking,”—is to constantly broaden our minds.

**Q:** How do you define the humanities – in the United States and Europe? Is there a way to connect their specific efficiency—if there is such a specific efficiency? Or do you not think, after all, that the omission of the humanities from Stanford University’s large fund-raising campaign has to do with—perhaps quite realistic—doubts about their efficiency?

のような教育上の訓練は私にとっては悩みの種です。何故なら、偉大な哲学テキストの難解さは学生たちにとっても教員の側にとっても取り組みがよいある難問に違いないからです。こうした難問に立ち向かうことが、ひいては個々のスタイルの発展・強化に役立つのであり、ごく一般的な、ありふれた方向に思考を飼い馴らすべきではないと思います。たとえば、私は最近プラトンについての授業を行ったのですが、20歳代の読者が最も強い興味を抱く部分は、現在の私のプラトンの理解とも、40年ほど前の私が読んだときのプラトンの理解とも異なることを知りました。このような多様性も、チャンスがある限り常に発展させ強化していくべきもののなのです。

ご質問に対する答えの締めくくりに次のこと申し上げておきたいと思います。人文学部にある種の能力（たとえば作文能力）を教えることを期待されるのは当然ですが、人文学の役割と本来の存在理由は、決してそのような技能と知識の伝達ではありません。むしろ、知識の伝達は人文学が副次的に生み出す効果なのだと思います。長い目で見れば、現代の社会生活に対する人文学の貢献はかなりのものだと思うのですが、その一方で私は、もっと積極的に（そして熱狂的に）結局のところ人文学は贅沢の実践なのだと認めてしまったほうがいいのかもしれないとも思います。人文学がなくても社会は問題なく存続することは間違いありません（その意味では、人文学の存在を何らかの実利によって正当化するのは、不適切であるだけでなく作戦としての的外れなのです）。しかし、人文学が最も得意とするのは、「リスクフル・シンキング」の概念を強調すればの話ですが、我々の思考の幅を常に広げていくことです。

**Q:** アメリカ合衆国およびヨーロッパの「人文学」はどのように定義できるとお考えですか？ その人文学固有の有用性（それがあるとしてですが）を結び合わせる方法はあるのでしょうか？ スタンフォードの資金集めキャンペーンから人文学が外されたのは、人文学の有用性に対する（おそらく、とても現実主義的な立場からの）疑念と関係があるとは思いいになりませんか？

**A:** There have been certain proposals for a “definition” of the humanities at the historical moment of their separation from the sciences, i.e. in the late 19th and early 20th centuries. The German philosopher Wilhelm Dilthey, for example, who greatly contributed to the establishment of the German word “Geisteswissenschaften” (“sciences of the spirit” for “humanities”), proposed to subsume, under this name, all of those academic disciplines whose core operation was “interpretation,” understood to be the attribution and reconstruction of meaning.

This is quite possible—but I have my very general epistemological doubts regarding the usefulness of “defining” any historical phenomena. Rather than trying to “define” the humanities, I think we can simply refer to a cluster of disciplines (and their changing concerns) that have come down upon us through the tradition of the Western university (which is also the adopted academic tradition in many contemporary societies that are not Western as it is the case with Japan). And here the answer becomes obvious—if not to say banal: the humanities are philosophy, history, literary Criticism, art history, musicology, etc. (despite the temporary ambition, back in the 1970s and 1980s, of some of those disciplines to redefine—or rather: revamp—themselves as “social sciences”).

As in Japan, the humanities have been under pressure in Europe and North American, over the past decades, because of their lack of any obvious and immediate social function—but it is my impression (although I may of course be wrong) that while, in Japan, this pressure comes, to a certain degree, from the society outside of the academic institution; in Europe and North American, the humanists seem to have to invent and emphasize the problem with such a seeming “lack of function” than do cultivated people outside of the humanities. During the 1970s and 1980s, at some of the top American universities, for example, there was a “battle” over the humanities “canon,” in which many humanists, strangely enough, were arguing for the elimination of the great classical

**A:** 人文学が科学から分離された時点で、つまり 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、人文学を定義しようとするいくつかの試みがありました。たとえば、ドイツの哲学者ヴィルヘルム・ディルタイは人文学 (humanities) にあたるドイツ語の「Geisteswissenschaften」(精神の科学) という用語の概念を確立するのに大きく貢献しましたが、彼はこの名称を「解釈」という作業、つまり意味の指定と再構築という操作を核とするすべての学問を包含するものにしようとした提案しました。

彼の定義は大いに可能なひとつの定義ですが、その一方で私は、そもそも歴史的な現象すべてを「定義すること」にどれほど意義があるのかということに認識論的な疑問を持っています。人文学を「定義」しようと試みる代わりに、もっと単純に、西洋の大学での伝統を通じて (それは現代では、日本も含め非西洋の多くの社会での大学の伝統にもなっていますが) 我々に与えられた学問群 (そして、その移り変わる関心事) を人文学だと捉えればいいのだと思います。すると (ありふれたと言わないまでも) 自明の答えが出てきます。人文学とは、哲学、歴史、文学批評、美術史、音楽学などのことです (1970 年代、80 年代には、これらの学問において、「社会科学」として再定義、あるいは刷新しようという試みが行われたこともあるのですが)。

日本の人文学と同様にヨーロッパや北米の人文学も、ここ数十年のあいだ、明確かつ直接的な社会的役割がないと言われて圧力を受けてきたのですが、私の印象では (もちろんそれが間違っている可能性もありますが)、日本ではアカデミックな世界の外の社会からその圧力がかかって来るのに対し、ヨーロッパや北米の人文学者たちは、人文学以外の学問の学者たちと比較して自分たちには「役割がない」ように見えるという問題を自らつくりだし強調することが多いように思われます。たとえば、アメリカのいくつかの名門大学では 1970 年代から 80 年代にかけて人文学の「カノン」をめぐる「闘い」がありました。とても奇妙なことに、人文学者たちの多くがカリキュラムから偉大な古典テキストを外すべきだと主張したのです。今日、古典のカノン (の少なくとも一部)

texts from the curriculum. Today, we can say that the main reason for the preservation of (at least parts of) the classical canon and, thereby, of the humanities, has been thanks to the intervention of alumni and students' families.

But while it is my impression that many humanists in the past (and I will admit that I was one of them!) went too far in insisting on the obligation that the humanities show practical functions, it would be equally counterproductive—and straightforwardly stupid—to avoid this question. Today, I see the problem like this: in the first place, and compared to other sectors of the university (think of medical schools or law schools, for example), there is only a small fraction of students in the humanities classes who, one day, will use the knowledge that they receive in the practice of their profession. This small fraction quite obviously are my colleagues of the future—and for reasons that I cannot explain here, I don't think it would be in anybody's interest to dramatically increase the number of humanists in present-day and future societies. This implies that the “efficacy” of humanities classes for those who will not be future academic philosophers, literary critics, historians, etc., will only show “indirectly.” I think that I can best explain my point with a concrete example.

Twelve years ago, I had an unusually talented undergraduate student at Stanford who came from the then still-existing country of Czechoslovakia (he was from an underprivileged background, by the way—with only a vague idea of the intellectual quality and challenges at university like Stanford). For a number of random reasons (and partly because he simply did not know the structure of the American university), this student, whose name is Martin Bruncko, ended up majoring in Comparative Literature and Philosophy—and by the time he had finished four years of college, he was one of the most brilliant young minds in the always-very-impressive cohort of Stanford students. For him, it seemed quite natural to continue applying for fellowships at graduate schools—with the goal of acquiring a Ph.D. and becoming a professor of literature and/or philosophy.

や、ひいては人文学そのものがカリキュラムに残ることになったのは、大学の卒業生たちや学生の家族が残してほしいと声を上げたおかげなのです。

過去の人文学者たちが（その中には私も含まれるのですが）人文学の実利的な役割を示す義務に固執しすぎたという印象がある一方で、この問題を避けるのもまた非生産的でまったくばかげたことだと言えるでしょう。今日、私はこの問題を次のように見えています。まず、人文学系のクラスにおいては、授業で得た知識を何かの職業に就いて働き始めてから使うことになる学生は、医学部や法学部など他の学部とは異なり、ごく一部です。そのごく一部というのは、もちろん将来の私の同僚ということになります。ここではその理由を説明することはできませんが、現在あるいは未来の社会において、人文学者の数を劇的に増やそうと考えている人などいないと思うのです。つまり、将来学問の世界で哲学者や文芸批評家や歴史学者になる学生を除いて、人文学の授業の「効果」は「間接的に」しか現れないということになります。私の考えを説明するためには、具体的な例を挙げるのが一番いいでしょう。

12年前、スタンフォードの学部の授業で、(当時の)チェコスロバキア出身の秀逸な学生をもったことがあります。彼は恵まれぬ家庭の出で、スタンフォードのような大学の知的水準の高さや要求される努力について漠然とした考えしか持っていませんでした。様々な理由があって（アメリカの大学の仕組みがよくわかっていなかったということもひとつの理由ですが）、マルティン・ブルンスコというこの学生は、結局、比較文学と哲学を専攻することになりました。そして、4年間の学部での課程を終えたときには、優れた学生の多いスタンフォードの学生たちのなかでも特に優秀な学生の1人となっていました。彼は、当然のこととして、続いて大学院に願書を出し、ゆくゆくはPh.D.を取得して文学ないし哲学の教授になろうと考えていました。しかし私は、マルティンは成績優秀で頭の切れる学生だけれども、本当はもっと人生の実際的な（スピードの出る車や高価なファッ

Now, it had always been my impression that Martin, while he was high-achieving and brilliant, was more naturally interested in life's practical issues – ranging from fast cars and expensive fashion up to the stock market and politics—and this is why, in long office hour sessions, I tried to convince him (and was ultimately successful in doing so) to rather apply for a fellowship at a so-called “professional school,” preferably a professional school in Political Science. He did so, and indeed continued his studies at the Kennedy School of Government at Harvard. During his Harvard years, already, the Embassy of the Slovak Republic (which had meanwhile broken off from the Czech Republic), contacted and recruited him—so that, six or seven years ago, Martin returned to his native Bratislava and entered government service at a very high level. It was him who organized, on behalf of the Slovak government, the summit between Vladimir Putin and George Bush at Bratislava—and shortly thereafter, he was appointed Deputy Minister of Finance and Economy of his country. Only a few weeks later, I read in the *Economist* that Martin Bruncko was the mastermind behind a radical reform of the Slovak economy, which is now one of the fastest growing economies in the world. Now, Martin is not only convinced that, one day, as soon as he has made enough money, he will return to the University and acquire that Ph.D against which I had recommended him; he is also and above all certain that his success in the political and economic profession has been largely due to his capacity for thinking through complex problems without losing the ability to come up with his own solutions and new views.

I think it will be among the key challenges for the humanities of the future to invent and design classes and formats of teaching that contribute to the development of talents like Martin Bruncko's, rather than acting as if all of the students who ever decide to choose our courses needed to become future colleagues.

ションから、株式市場や政治に至るまで多岐に渡る）ことがらに向いているのではないかという印象をずっと抱いていました。そのため、長時間にわたる面談を重ねて、いわゆるプロフェッショナルスクール、できれば政治学の学校の奨学生に応募してはどうかと勧め、ついに彼を説得することに成功しました。彼はハーヴァード大学のケネディー行政学院に進んで勉強を続けました。ハーヴァード在学中からすでに（チェコ共和国から分離した）スロバキア共和国大使館からの誘いを受け、そこに就職することになりました。そして今から6、7年前、マルティンは生まれ故郷のブラチスラバに帰り、政府の高官になったのです。スロバキア政府の代表としてブラチスラバのウラジーミル・プーチンとジョージ・ブッシュの首脳会談を準備したのは他ならぬ彼です。そしてその後、スロバキアの財務財政副大臣に任命されました。その数週間後、私は『エコノミスト』誌で、スロバキアは世界の中でも最も急速な経済成長を遂げている国のひとつであり、マルティン・ブルンスコがその急進的な経済改革の立役者である、という記事を読みました。さて、マルティンは、十分な財力をつけたら即刻大学に戻って、私があれば反対した Ph.D. を取得しようと考えています。そればかりではなく、彼は自分が政治経済の分野で成功したのは、困難な問題を解決しようとする際に自分なりの考えや新しい見解を考え出すことをあきらめずにいられる能力によるところが大きいと確信しているのです。

私は、未来にむけた人文学の重要な挑戦のひとつは、授業に出ている学生の誰もが間違いなく将来研究者になるとでもいうかのような授業をするのではなく、マルティン・ブルンスコのような才能を伸ばすのに役立つような授業内容と形式を考え出し、そのような授業をデザインして行くことにあると思います。

**Q:** I am a high school teacher and therefore naturally interested in approaches to teaching humanities subjects to younger students. Do you think that there are such specific approaches? And you agree with my reaction to your lecture, i.e. that younger students often better than more advanced students at practicing “riskful thinking”?

**A:** In principle, I certainly agree. It has often been said that the “unspoiled” minds of younger students—and even of children—show astonishing philosophical wisdom and daring (“daring” and “wisdom” are similar qualities here). But I don’t want to go too far. For (and here I agree with the French philosopher Jean-François Lyotard) the act of thinking is pleasurable and painful at the same time – not only pleasurable. Or perhaps we could say that, not unlike certain forms of erotic experience, pain, the difficulty of thinking, can be both part and a condition of the pleasure of thinking. You did

**Q:** 私は高校の教員をしており、人文学系科目を高校生に教えるための方法に関心があります。高校生向けの特別な方法というものはあるのでしょうか？ それから、私は今日の講演を聞いて、「リスクフル・シンキング」に関して、これは経験を積んだ学生よりも若い学生の方が得意であることが多いのではないかと思ったのですが、それについてどう思われますか？

**A:** 基本的には、あなたのご意見に賛成です。若い学生やこどもの「まだ損なわれていない」精神は、驚くべき哲学的賢明さと勇気を示すものだとよく言われることです（ここで言う「賢明さ」と「勇気」は同種の資質です）。しかし、あまり話を広げ過ぎたくはありません。というのも（この点において私は、フランスの哲学者、ジャン＝フランソワ・リオタールに賛成なのですが）、考えるという行為は単に楽しいだけのものではなく、同時に楽しくもあり苦痛を伴うものでもあるからです。あるいは、ある種のエロティックな経験と変わらず、苦痛、すなわち思考するときの困難は、思考する喜びの一部で



not say this explicitly, but it would probably be an error to associate philosophy and the humanities at large with young minds if you thought that what the humanities provide, unlike mathematics, for example, was only pleasurable.

Perhaps one should and could even go so far as to say that universities should cultivate, cultivate within the limits of authenticity, an image of being difficult—because, in the first place, this is what their contents are supposed to be—but also because, at least to a certain degree, being difficult and challenging makes the academic world more appealing. As they become more financially and operationally independent (and thereby by more exposed to competition), many universities in Germany, in order to attract young students, have introduced the institution of “Kuscheltage”—a difficult-to-translate (and certainly very awkward) word that means something like “hugging days”—days in which more advanced students, university administrators, and professors go out of their way to illustrate to prospective students that life and learning at their University will be very easy, that there is no serious transition or gap separating high school from the University, etc. Now this is certainly counterproductive—above all because I fear that with such a strategy, universities lose rather than gain appeal.

But what I’m saying does not imply that I am arguing in favor of building up, quite artificially, the distance between the University and its environment. On the contrary, I think, for example, that it is important, sometimes at least, for my enthusiasm for certain texts, certain authors, and certain problems, to become contagious to my students. Some years ago, in a lecture course entitled “Things of Beauty,” which served as an introduction to the humanities for several hundred first-year Stanford students, I recited (first in Spanish and then in English translation) and analyzed a text by the great poet Federico García Lorca, entitled “Little Viennese

もあり、その条件でもあると言ってもいいかもしれませんが、そうははっきりとはおっしゃっていませんでしたが、万が一、人文学が数学などと違って楽しいだけだったとすれば、哲学・人文学全般と若い人たちの思考能力の組み合わせは良くないものだという事になってしまうでしょう。

もしかすると、行き過ぎにならない範囲内で、大学というのは難しいのだというイメージを広めるべきだとまで踏み込んで言うべきですし、そのように言うことが可能なのではないのでしょうか。何故なら、まず、大学で扱う内容は難しくて当然だと思われているだけでなく、少なくともある程度までは、難解であったり一筋縄ではいかなかったりすることが学問の世界をより魅力的にしているからです。大学の経営や運営の面での自立性が高まる（したがって、競争に晒されることが多くなる）のを受けて、ドイツの多くの大学が新入生を獲得するために「Kuscheltage」（抱っこしてあげる日）という制度を導入しました。これは訳すのが難しく、ぎこちない語でもあります。いってみれば「愛情表現日」のようなもの、すなわち、先輩学生や大学の事務担当者、教員たちが出かけていって、将来の大学生たちを相手に、大学生活と大学での勉強はとても易しいですよ、高校と大学の間に大きな転換や隔たりはありません、と伝えるための日なのです。しかし、それはまったくの逆効果となるでしょう。何故なら、そのような戦略をとれば、大学の魅力が増すどころか興味を失わせることになりかねないからです。

しかし、このように言うからといって、私は大学とその周囲の環境との間にまったく人工的に距離をつくらうと提案しているわけではありません。逆に私は、たとえばあるテキストや作家や問題に対して抱く熱狂を学生に伝染させることが、少なくともときには重要だと思います。数年前にスタンフォードの1年生、数百人を相手に「美の物体」という題目で人文学へのイントロダクション的な講義を行ったのですが、そこで私は偉大なる詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカの「ウィーン小ワルツ」という詩を（初めはスペイン語で、次に英語で）朗読し、解説しました。このテキストは、ときに穏やかな、ときに強烈な同性愛のイメージに満ちています。それは明らか

Waltz.” Now this text, quite obviously and undeniably, indulges in tender and often strong homoerotic images—and as I was reading this poem to my large young audience, my eyes filled with tears because, over and over again—not the least because I remembered to what a miserable life homosexual men like García Lorca were exposed in Western culture during the first half of the 20th century. My students were impressed—or perhaps I should rather say: I managed to “engage” my students. Some of them even thought that I was homosexual myself (which, to my knowledge, is not the case). But regardless of such biographical projections, I felt that I had been successful simply through *not* trying to suppress my own emotions as a reader.

**Q: (from a colleague who attended the lecture by videoconference from Kyoto):** You seem to believe that “spatial co-presence,” sitting together around a table, for example, is an important, if not decisive or even necessary, condition for “riskful thinking” to take place. Now, as you see that I have followed your lecture by video conference from Kyoto, do you really think that I got less out of it, that I am less inspired than people sitting with you in the same room at Keio University?

**A:** Your question shows—or at least produces the hope in me—that you’ve followed my lecture with interest—and I of course much prefer that you were present by video conference over my not having had an opportunity to present my arguments to you at all. So it would be wrong to assume that I have a black and white, quasi-“ideological” prejudice against all kinds of distance learning.

And yet I profoundly believe that learning together, learning in spatial co-presence, can have an effectiveness that reading a book or watching a teleconference will never have. And what makes this so? I hate to admit that

な事実であり疑いの余地はありません。さて、若い学生たちに向かって詩を朗読していると、私の目には次から次へと涙があふれてきました。何よりまずガルシア・ロルカのような同性愛者が20世紀前半の西洋文化の中で如何に惨めな人生を送らねばならなかったかということに思いが至ったからですが、他にもいろいろ理由がありました。私の学生たちも感銘を受けていました。あるいは、私は学生たちを「巻き込む」ことに成功したのだと言った方がいいかもしれません。中には、私自身が同性愛者であると思った学生たちまでいました。（私の知る限り、それは事実ではありません）しかし、そのような伝記的投影を抜きにして、私は一読者としての自分の感情を抑えなかったことによって、学生たちの興味を引き出すことに成功したのだと感じました。

**Q: (ビデオ会議システムを通じて京都から講演に参加していた教員から) :** 同じ空間を共有してその場に居ること、ひとつの机を囲んで一緒に座ることは、「リスクフル・シンキング」が起こるための（決定的ないし必要条件とまでは言わないまでも）重要な条件だとお考えのようです。ところが、ご覧の通り私は京都からビデオ会議装置を介してあなたの講演を聴いて来たわけですから、私が聞いた講演は慶應大学で同じ部屋に座っている方々よりも中身が少ない、つまり私は得たものが少ないのだということになるのでしょうか？

**A:** ご質問からは、私の講演に興味をもって聴いて下さったことが分かります。少なくとも私はそのように期待して良さそうです。私の議論を提起する機会がまったくないよりは、ビデオ会議システムを通じて出席して下さるほうが良いと私ももちろん思います。ですから、あらゆる種類の遠隔学習に対して、白黒のはっきりした、ほとんどイデオロギー偏向的な先入観をもって私が反対していると思われるのであれば、それは違います。

しかしながら、一緒に学ぶこと、同じ空間を共有しながら学ぶことには、読書やビデオ講演には決して果たしえないような効力があると私は強く信じています。では、何故そういうことになるのでしょうか？ 残念ながら

I do not exactly know. I am just relying on intuition—but I think and I hope that many people share this intuition. As I said, one of the greatest threats to the University as we know it, is to be replaced by devices of distance learning—in which case it would be high time for people like me to transform the intuition (so far: no more than an intuition) that there is a specific efficiency to learning in spatial co-presence, into experiments that give a stronger validity to this point.

**Q:** Is there a reform going on in the forms and institutions of teaching at Stanford University—especially in the humanities? And if so, does your idea of “riskful thinking” have any influence on these reforms?

**A:** From a strictly formal and institutional point of view, I have to say that I have no influence whatsoever at Stanford University – above all because I have never held any administrative or decanal office of importance there (I will indeed retire in ten years or so as one the few professors who, never in their lifetime, has held any decanal function). On the other hand, I have no “conspiracy theory” for explaining my absence from the administration—rather, I am grateful to my University to never confront me with such possibilities and obligations.

Over the past decade, Stanford has indeed introduced two major changes in the teaching of the humanities to undergraduate students, especially in their first and second years. The one profound change has been to replace the almost century-old tradition of “Canon courses” (“Great Works,” “Cultures, Ideas and Values,” etc.) with more thematically-concentrated lecture classes that have to fulfill certain “distribution requirements.”

ら、正確なことは私にも言えません。これは直感的なものなのです。けれども、この直感は多くの人に共有されていると私は考えますし、またそうであって欲しいとも思います。すでに申し上げたように、私たちの知っている大学というものに対する最大の脅威のひとつは遠隔学習の装置によって取って代わられてしまうことです。そんなことになれば、同じ空間に居合せて学習することには特別の効力があるという直感（まだ直感のようなものにすぎませんが）、それを、ただの直感ではなく、より説得力のある正当性を示すための具体的作業へと、私のような人間たちが変えて行く時が来たということになるでしょう。

**Q:** スタンフォード大学、特に人文学では、授業の形式や制度の改革は行われていますか？ 改革が行われているとすれば、先生の「リスクフル・シンキング」というアイデアがそれに何らかの影響を及ぼしているのでしょうか？

**A:** 厳密な意味での形式、制度に関して言えば、私はスタンフォード大学に対して何の影響力も持っていないと申し上げなければなりません。というのも、まず私は運営事務関係や「部長」と名のつく要職についたことがかつて一度もないからです（10年もすると、私はそのような経験をせずに退職する数少ない教員の1人として勤めを終えることになるでしょう）。また一方で、運営に関するポストに就かずすむよう「陰謀」を企んでもおりません。むしろ私は、そのような機会や義務に遭遇せずに済ませてくれていることについてスタンフォード大学に感謝しています。

さて、スタンフォードは確かに、過去10年間で学部生向け人文学科目の授業、特に1・2年生向けの授業に2つの大きな変更を加えました。ひとつ目の抜本的改革は、もう百年前からの伝統だった「カノンの科目」（「名作」、「文化、思想、価値」などの科目）をやめて、「分野別必修科目」として同じく単位を充足する、よりテーマの絞られた科目に代えることでした。テーマは何であれ、その科目では、人文学で必要とされる何らかのスキ



Regardless of the specific topic, they have to teach certain skills that are required in the humanities; and they also have to take care of social and cultural diversity, for example. So far, however, and in spite of my enthusiasm for this design (I have taught two such courses in the past several years), they do have a rather negative reputation among our undergraduate students. Perhaps three academic quarters with lots of time invested into one central humanities course is too much for many of them.

Much more popular are the so-called “Stanford Introductory Seminars.” The University administration tries to recruit top scholars (among them our Nobel Laureates at Stanford) to design and organize small-group courses (of between seven and sixteen students) around monographic topics of their ongoing research, for freshmen and sophomores. The—shocking and liberating—idea is to confront underclass students with the most advanced research problems and strategies. Meanwhile, these courses are not only popular among our students; there are also many faculty who actively apply to teach them (not least – and I am not saying that this is a bad reason!—because the University is ready to pay a considerable amount of extra salary to those who teach those courses). Unfortunately, however, there are perhaps too many faculty today who want to teach Stanford Introductory Seminars—“too many,” although I trust and respect almost all of my colleagues at Stanford University (which was by no means the case at previous universities, mainly in Europe, where I have been teaching). The problem is—or can be—that the entire idea loses its central intuition if the instructors entrusted with Stanford Introductory Seminars do not have a very clear, engaging research project of their own. Wherever and whenever potential instructors do have such “riskful” research projects, these courses for freshmen and sophomores can be a truly successful format and instrument of academic teaching.

ルを教えなければなりません。また、社会的、文化的な多様性も考慮に入れなければなりません。私は、これは素晴らしい試みだと思ったのですが（実際私は過去数年にこの種のクラスを2つ持ちました）、ところがこの科目は学部生の間ではあまり評判が良くないのです。おそらく多くの学部生にとって、3学期のあいだ人文学のメイン授業にたくさんの時間をつぎ込むのは大変すぎると感じられるでしょう。[訳者註：スタンフォード大学は秋・冬・春の年3学期制]

これよりもずっと人気があるのが、いわゆる「スタンフォード入門セミナー」です。大学側に依頼された第一線の学者たち（その中にはスタンフォードのノーベル賞受賞者たちもいます）が、現在進行中の自分の単一研究テーマを題材に取り上げ、1・2年生向けに7～16人の少人数授業を企画・実行するのです。1・2年生たちを、最先端の研究の問題と戦略に立ち向かわせようというのが、その（衝撃的かつ大胆な）理念なのです。また一方で、この授業はスタンフォードの学生たちに人気があるばかりではありません。この授業を持ちたいと積極的に応募する教員が多数いるのです（この授業を持つ教員には大学側がかなりの額の特別手当を支払うから、という理由だけからではもちろんありません。もちろん、それが悪い理由だとも言いません）。しかし、困ったことに、現時点では「スタンフォード入門セミナー」を教えたいと願う教員たちの数はおそらく多すぎるのです。もちろん、スタンフォード大学で教える同僚たちのほぼ全員を私は信頼し、尊敬しています（私が以前に教えていたことのある、主にヨーロッパの大学ではとてもそうは言えませんでした）が、それでも「多すぎる」のです。そのことが原因で起きている問題、あるいは将来直面することになる問題は、スタンフォード入門セミナーを任された教員が、主旨が明瞭で、かつ積極的に参加する気持ちを学生に抱かせるような、そんな独自の研究プロジェクトを持っていなかったら、この企画全体を牽引するひらめきのようなものが失われてしまうということなのです。担当候補となる教員が「リスクフル」な研究プロジェクトを確かに持っていれば、この1・2年生向けの授業は、いつでも、そしてどこでも真に効果的な大学教育の形式と手段になりうるのです。

**Q:** Frankly, I am astonished that you associate the humanities, above all, with “riskful thinking.” Yes, the style of thinking that you describe under this name is appealing and no doubt socially and culturally adequate. But I believe that it is practiced much more – and much more naturally—outside of the humanities. As you probably know, the Stanford Law School, for example, has an international reputation for developing new legal reactions in regards to all forms of electronic communication. This debate should be your best example of “riskful thinking”—instead of, for example, reading classical authors in Western literature.

**A:** Believe me, at no moment did I imply—let alone want to say—that “only the humanities” are capable of “riskful thinking” in the sense of having a specific vocation for “riskful thinking.” I certainly agree that we can garner outstanding examples of this intellectual style from many academic disciplines outside the humanities—and, also, probably from interactions outside the university.

So how did I give you this erroneous impression (this must have been my fault)? Well, perhaps and simply (in the first place) because I happen to be a humanist, and I was asked to speak about the humanities in the contemporary university and universities of the future. But perhaps I could add one slightly less banal reason and expectation in answer to your questions. Disciplines and fields such as medicine, legal studies, and engineering have an eminent function in the transmission of professionally relevant knowledge, and also in problem-solving. In addition to that, they certainly often produce “riskful thinking” on the highest level of quality and complexity. For the humanities, in contrast (and with very few exceptions), “riskful thinking” is, I fear (and I hope), the only claim to true glory, the only function that

**Q:** グンブレヒト先生がとりわけ人文学と「リスクフル・シンキング」を結びつけていることについて、率直に申し上げて、私は驚きました。確かに、先生が「リスクフル・シンキング」と呼んでいらっしゃるような思考のスタイルは魅力的であるし、社会的・文化的に有用なものだと思います。けれども、それは人文学の外において、より多く（そしてずっと自然な形で）実践されているのではないのでしょうか？たとえば、先生もご存知でしょうが、スタンフォード・ロースクールはあらゆる形態の電子コミュニケーションに関する新しい法的対応を編み出していることで国際的に高い評価を得ています。この法律学の議論の方が、たとえば西洋文学の古典作家を読むことよりも、「リスクフル・シンキング」の例として最適なのではないかと思うのですが。

**A:** 本心から申し上げます。「人文学のみ」が「リスクフル・シンキング」に対して特別な適性をもっているという意味において、「リスクフル・シンキング」をすることが可能なのだなどと、遠回しにも言おうとは一度も思っておりません（ましてや、そんなことを主張するつもりもありません）。人文学以外の多くの学問分野に、そして、おそらくは大学外における人間のインタラクションの中にも、このような知のあり方の見事な例を見出すことができるということについては、まったく同意見です。

では、何故そのような誤った印象を与えてしまったのでしょうか（私に原因があるに違いありません）？まず、おそらくごく単純に、私がたまたま人文学者であり、未来の大学における人文学について話すよう依頼を受けたということも理由のひとつかもしれません。しかし、もう少し平凡でない理由、ないし希望的観測を、ご質問に対する答えとして付け加えることができるように思います。医学や法学、工学などの学問分野には、専門職のために必要な知識の伝達、そして問題解決というはっきりした目的があります。その上さらに、そこでは質と複雑さにおいて最高レベルの「リスクフル・シンキング」がしばしば行われていることも確かです。人文学を見ると、打って変わって（ほぼ例外なく）、「リスクフル・シンキング」だけが人文学の真の栄光を保証してくれるもの、単なる「こじつけ」じみて聞こえない唯一の機能



does not look simply “artificial.” But, as you see, this is not a perspective or an answer in which I will try to give the humanities the “upper hand” (as humanists have done for two centuries now, often with frankly ridiculous arguments). Rather, and once again (but I don’t mind), the humanities appear in my argument as “poor relatives.” As poor relatives sometimes emphasize their ethical values (to compensate for their poverty), I may have overstated the “riskful thinking”—potential of the humanities in compensation for their irrelevance in the transmission of professionally pertinent knowledge and practical problem-solving.

(This is a transcription of the lecture)

なのではないかと思います。しかし、おわकारの通り、私は人文学が他の学問よりも優位にあると言おうとしてこのような見解を述べ、このように答えているのではありません（これまで2世紀に渡り、人文学者たちは率直に言ってばかげた論点に基づいてそのような主張をしてきたものですが）。どちらかと言えば、私の議論のなかに人文学は「貧弱な冴えない親類」として登場しているのです。結局またここに帰ってきてしまうのですが（それでかまわないと思います）。「冴えない親類」が時として（貧弱さの埋め合わせをすべく）自分たちの倫理的な価値を強調するように、人文学には専門職に役立つ知識の伝達や実的な問題解決とあまり縁がないことの埋め合わせをしようとして、人文学の潜在的可能性である「リスクフル・シンキング」を私は強調しすぎてしまったのかもしれない。

(翻訳：南映子)



慶應義塾大学教養研究センター  
FD を考える 7

大学の人文学に未来はあるか？

2007 年 3 月 30 日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 横山千晶

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1  
TEL 045-563-1111 (代表)  
Email lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp  
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

©2007 Keio Research Center for the Liberal Arts  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。  
ISSN 1880-3628  
ISBN 978-4-903248-12-7